

北野遺跡(第12次)・曾祢崎遺跡(第3・4次)
・鱗尾城跡・平尾遺跡 発掘調査報告

2020（令和2）年12月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1. 本書は三重県多気郡明和町上野及び平尾に所在する北野遺跡（第12次）・曾祢崎遺跡（第3・4次）・鱗尾城跡・平尾遺跡の工事立会による埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 工事立会は、平成29・30・31（令和元）年度高度水利機能確保基盤整備事業（斎宮地区）に伴い、三重県松阪農林事務所の労務提供を受けて実施した。なお、発掘調査の経費は、一部国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、他は三重県農林水産部から経費の執行委任を受けた。
3. 現地での調査は、平成29・30・31（令和元）年度に三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘を行った面積は、北野遺跡（第12次）が約97.2m²、曾祢崎遺跡（第3・4次）が132.2m²・37m²、鱗尾城跡が42m²、平尾遺跡が88.4m²である。

4. 工事立会は下記の体制で実施した。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課

平成29年度 主幹 中井英幸 谷口文隆

主査 伊藤文彦

主事 三宅知世

技師 鐘木厚太

平成30年度 主幹 中村法道

主査 伊藤文彦

主査 倉野雅文

平成31（令和元）年度

主査 倉野雅文

研修員 山西隆治

5. 本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物の図面作成は、調査担当者・報告書作成者が行った。
本書の執筆は、第I章を中井英幸・中村法道が、第VI章および第VII章、第VIII章第3・4節を中村が、それ以外を中井が行った。全体の編集は、中井・中村が行った。
6. 北野遺跡（第12次）・曾祢崎遺跡（第3・4次）・鱗尾城跡・平尾遺跡の発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

1. 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「伊勢」(平成10年発行)、2006三重県共有デジタル地図(平成19年測図)などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している(承認番号:令和2年4月1日付け 三総合地第2号)。
2. 本書で用いた座標は、すべて世界測地系に基づいている。
3. 本書で示す方位は、すべて座標北を用いている。
4. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄(編)2011『新版標準土色帖』(34版)日本色研事業株式会社に拠る。
5. 本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
S H : 壱穴建物 S K : 土坑 S D : 溝 Pit : 柱穴
6. 遺物実測図の縮尺は基本的に1/4とし、各遺物の縮尺は図中スケール及び図版キャプションにて明示している。
7. 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺構・遺物写真の縮尺は不同である。

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法	8
第1節 調査区の設定	8
第2節 掘削	8
第3節 遺構番号の付与	8
第4節 写真撮影	8
第IV章 北野遺跡（第12次）の調査	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	9
第3節 遺物	12
第V章 曽祢崎遺跡（第3・4次）の調査	15
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構	18
第3節 遺物	19
第VI章 鱗尾城跡の調査	22
第1節 調査の概要	22
第2節 遺構	22
第3節 遺物	23
第VII章 平尾遺跡の調査	25
第1節 調査の概要	25
第2節 遺構	25
第3節 遺物	27
第VIII章 調査のまとめと考察	28
第1節 北野遺跡	28
第2節 曽祢崎遺跡	29
第3節 鱗尾城跡	31
第4節 平尾遺跡	31
第5節 おわりに	31

図版目次

第1図 調査区位置図	3
第2図 周辺遺跡位置図	5
第3図 北野遺跡(第12次)調査区平面図 ・土層柱状図	10
第4図 北野遺跡(第12次)調査遺構平面図 ・土層断面図	11
第5図 北野遺跡(第12次)調査遺物実測図	13
第6図 曽祢崎遺跡(第3次)調査A地区平面図 ・土層柱状図	15
第7図 曽祢崎遺跡(第3次)調査B地区平面図 ・土層柱状図	16
第8図 曽祢崎遺跡(第3次)調査C地区平面図 ・土層柱状図	17
第9図 曽祢崎遺跡(第4次)調査区平面図 ・土層柱状図	18
第10図 曽祢崎遺跡(第3次)調査遺物実測図	19
第11図 曽祢崎遺跡(第4次)調査遺物実測図	20
第12図 鱗尾城跡調査区平面図・土層柱状図	22
第13図 鱗尾城跡調査遺構平面図・土層断面図	23
第14図 鱗尾城跡調査遺物実測図	23
第15図 平尾遺跡調査A地区平面図 ・土層柱状図	25
第16図 平尾遺跡A地区SK1～5土層断面図	26
第17図 平尾遺跡調査B地区平面図・土層柱状図	26
第18図 平尾遺跡B地区SD1～4土層断面図	26
第19図 平尾遺跡調査遺物実測図	27
第20図 古代伊勢道推定ルート	30

表目次

第1表 三重県内土師器焼成坑確認遺跡	7
第2表 北野遺跡(第12次)調査遺構一覧表	14
第3表 北野遺跡(第12次)調査出土遺物一覧表	14
第4表 曽祢崎遺跡(第3・4次)調査出土遺物一覧表	21
第5表 鱗尾城跡調査遺構一覧表	24
第6表 鱗尾城跡調査出土遺物一覧表	24
第7表 平尾遺跡調査遺構一覧表	27
第8表 平尾遺跡調査出土遺物一覧表	27

写真図版目次

写真図版1 北野遺跡(第12次)調査	33
調査区北部全景/調査区中央部全景	
調査区南部全景/S D1201土層断面 /S H1207	
写真図版2 北野遺跡(第12次)調査	34
S H1207/S D1206	
写真図版3 北野遺跡(第12次)調査出土遺物	35
写真図版4 曽祢崎遺跡(第3・4次)調査	36
第3次調査A地区全景	
/第3次調査B地区全景	
/第3次調査C地区全景	
/第4次調査区全景	
写真図版5 曽祢崎遺跡(第3・4次)調査出土遺物	37
写真図版6 鱗尾城跡調査・出土遺物	38
調査区全景/S K2検出状況 /S K2/出土遺物	
写真図版7 平尾遺跡調査	39
調査前/A地区/A地区SK2	
写真図版8 平尾遺跡調査・出土遺物	40
B地区全景/B地区東側 /B地区SD1/B地区SD5 /出土遺物	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本書で報告する調査は、平成29・30・31年度高度水利機能確保基盤整備事業(斎宮地区)に伴って実施した埋蔵文化財の記録保存にかかるものである。

平成22年度、三重県農林水産部農業基盤室において農業用管水路の埋設工事の実施が計画され、三重県教育委員会に協議があった。三重県埋蔵文化財センターが計画を精査したところ、工事予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地（北野遺跡、曾祢崎遺跡、鱗尾城跡、平尾遺跡、丁長遺跡等）が所在することが判明した。そこで、その保存について協議を重ねたが、現状保存は困難と判断し、工事予定地において範囲確認調査を実施することにした。さらに、その結果をふまえて調査範囲を確定し、労務提供による発掘調査を実施した。

当事業の主体は、三重県農林水産部、実施機関は県松阪農林事務所農村基盤室であり、調査主体は三重県教育委員会、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。

なお、本発掘調査に伴う埋蔵文化財の文化財保護

法等にかかる諸通知は以下のように行っている。

<文化財保護法等にかかる諸通知>

- ・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項通知

北野遺跡

平成24年6月1日付け 松農第4168号（県教育長あて県知事通知）

曾祢崎遺跡

平成29年12月27日付け 松農第4336号（県教育長あて県知事通知）

平尾遺跡

平成31年4月5日付け 松農第4016号（県教育長あて県知事通知）

- ・遭失物法にかかる文化財発見・認定報告

平成30年3月14日付け 教委第12-4425号（松阪警察署長あて県教育長通知）

令和2年3月24日付け 教委第12-4424号（松阪警察署長あて県教育長通知）

第2節 調査の経過

（1）調査の概要

北野遺跡においては、平成28年5月11日に13箇所の調査坑を設けて範囲確認調査を行った。その結果、古代の土師器、須恵器が出土したほか、土坑、溝などの遺構が確認された。そこで、平成28年度下半期に労務提供による北野遺跡（第9次）発掘調査を実施した。調査区は、調査坑9箇所分に相当する延長178mに及んだ¹¹⁾。

翌平成29年度下半期には、残りの4箇所分に相当する延長81mの調査区において、労務提供による北野遺跡（第12次）発掘調査を行った。

曾祢崎遺跡（第3次）においては、平成29年10月30日～11月2日に22箇所の調査坑を設けて範囲確認

調査を行った。その結果、土坑、溝が確認された。

そこで、平成29年度下半期に労務提供による曾祢崎遺跡（第3次）を実施した。調査区は大きく3箇所に分かれ、A地区、B地区、C地区として設定した。調査区の総延長は125mに及んだ。

曾祢崎遺跡（第4次）においては、平成30年10月3日～10月10日に19箇所の調査坑を設けて範囲確認調査を行った。その結果、溝と思われる遺構が確認された。そこで、同年下半期に労務提供による曾祢崎遺跡（第4次）発掘調査を実施した。調査区の延長は33mに及んだ。

鱗尾城跡においては、平成30年8月28・29日に9箇所の調査坑を設けて範囲確認調査を行った。その結果、磁器、山茶碗、土師器が出土したほか、遺構

としては土坑が確認された。そこで、平成30年度下半期に労務提供による鱗尾城跡発掘調査を実施した。調査区の延長は45mに及んだ。

平尾遺跡においては、平成30年8月20～31日に25箇所、令和元年9月11～17日に33箇所の調査坑を設けて範囲確認調査を行った。その結果、土坑や溝などの遺構や陶器や土器類などの遺物が確認された。そこで、平成31年度下半期に労務提供による平尾遺跡発掘調査を実施した。調査区は2箇所に分かれA区・B区として設定した。調査区の総延長は88.4mに及んだ。

丁長遺跡においては、令和元年12月10日～12月16日に2箇所の調査坑を設けて工事立会を行った。その結果、大半が擾乱により遺構や遺物の検出には至らなかった。

(2) 発掘調査の経過

現地での発掘調査は、平成29年11月、平成30年1月下旬～2月上旬、平成30年10月、令和元年9月下旬～10月上旬に行なった。

現地調査の開始から終了までの調査進行の概略は、以下の調査日誌(抄)の通りである。

【調査日誌(抄)】

[平成29(2017)年]

11月2日 曽祢崎遺跡(第3次)C地区の発掘調査。
重機による表土掘削。遺構検出・遺構掘削。
全景写真撮影。図面作成完了。

[平成30(2018)年]

1月29日 北野遺跡(第12次)発掘調査開始。
重機による表土掘削。
30日 遺構検出。調査区北部の遺構掘削完了。
調査区北部の全景写真撮影。
31日 調査区南部の遺構掘削継続。基準ピン設定および座標測量。図面作成開始。
2月1日 調査区南部の遺構掘削完了。図面作成継続。基本層序確認用ミニトレンド設定・掘削。
2日 調査区南部の全景写真撮影。遺構個別写真撮影完了。図面作成完了。
5日 曾祢崎遺跡(第3次)発掘調査開始。A地区的重機による表土掘削。遺構検出・遺構掘削。全景写真撮影。図面作成継続。

6日 A地区的図面作成完了。B地区的重機による表土掘削。遺構検出。

7日 B地区的遺構検出継続。遺構掘削。全景写真撮影。図面作成完了。

10月10日 鱗尾城跡の発掘調査開始。重機による表土掘削。遺構検出・遺構掘削。

11日 遺構掘削完了。図面作成開始。

15日 全景写真撮影。図面作成完了

16日 曾祢崎遺跡(第4次)の発掘調査。重機による表土掘削。遺構検出・遺構掘削。
全景写真撮影。図面作成完了。

[令和元年(2019)年]

9月30日 平尾遺跡の発掘調査開始。B区全域の重機による表土掘削。遺構検出・遺構掘削。

10月1日 遺構写真・全景写真撮影。図面作成完了。

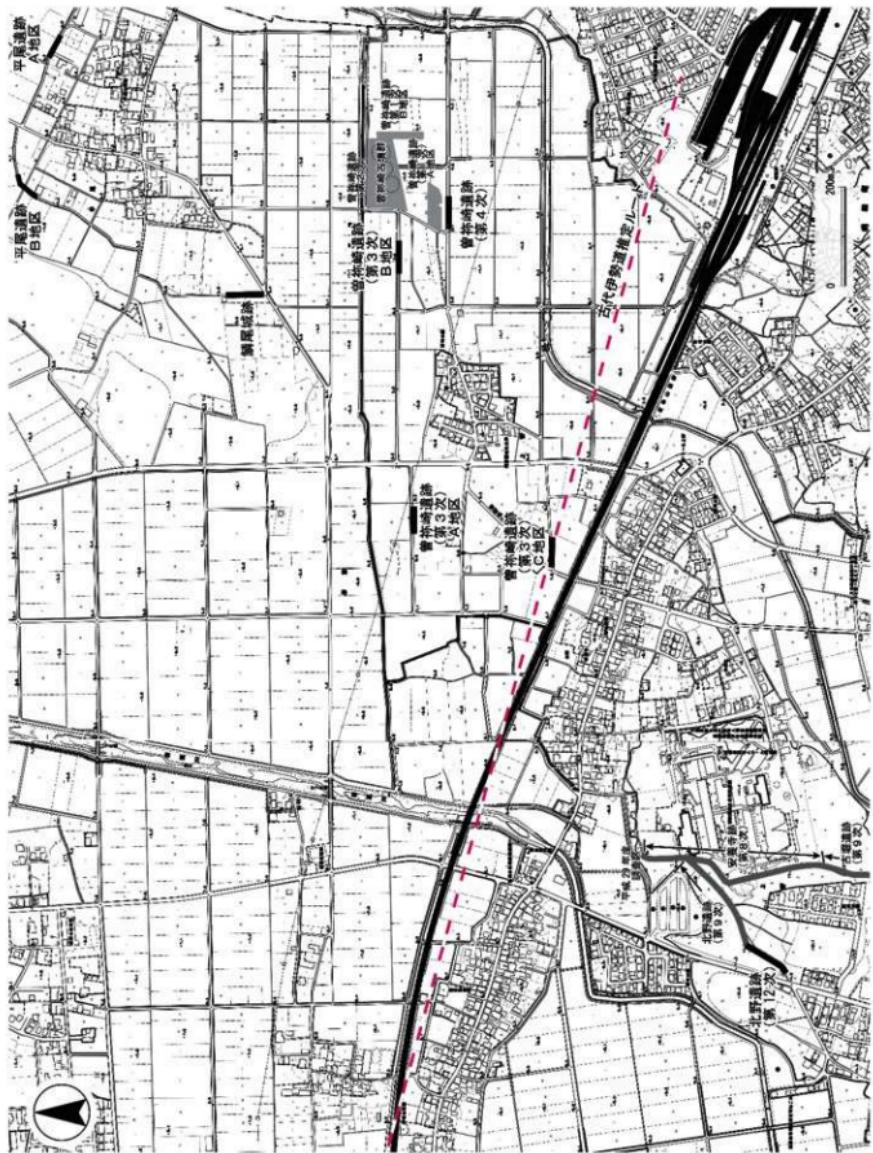
10月2日 A区0～24mの重機による表土掘削。
遺構検出・遺構掘削。遺構写真・全景写真撮影。図面作成完了。

10月3日 A区24～44.4mの重機による表土掘削。
遺構検出・遺構掘削。遺構写真・全景写真撮影。図面作成完了。

【註】

1) 北野遺跡(第9次)発掘調査については、以下の報告書にて報告済み。参照されたい。

・三重県埋蔵文化財センター2018『安養寺跡(第8次)・古堀遺跡(第9次)・北野遺跡(第9次)・露越遺跡(第10次)発掘調査報告』



第1図 調査区位置図 (1 : 10,000)

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

北野遺跡（1）、曾祢崎遺跡（2）、鱗尾城跡（3）、平尾遺跡（4）の4遺跡は三重県多気郡明和町に所在する。伊勢平野内に位置する明和町は、北限を伊勢湾に面し、3方位を松阪市、多気町、玉城町、伊勢市に囲まれる。地質区分上、明和町は中央構造線の北約4.5km、内帯にあたる領家帶南限付近に位置する。中生代白亜紀（1億年前～約6500万年前）ころにできた花崗岩類は明和町の南から南西部にかけて分布し、山地を形成している¹⁾。新生代第四紀更新世（200万年前～1万年前）の地層が段丘を構成しており、高位礫層（いわゆる山砂利層型の堆積物）には、チャート、ホルンフェルス、砂岩、石英斑岩などからなる松阪礫層が存在する。

4遺跡は、高見山地に源を発する櫛田川と、大台ヶ原に源を発する宮川との間に存在する。2つの大河川の中・下流にあたるために、これまでの長い年月の中で幾度となく氾濫が繰り返されてきた結果、段丘が浸食されて大小の中位台地が複数形成され、その周りには沖積地が広がる²⁾。水害の被害を受けにくい台地上には、古くより人間活動が盛んに繰り広げられ、4遺跡以外にも多くの遺跡が認められる。中でも代表的なものとして、4遺跡の北西約1.5kmには国史跡斎宮跡（5）、北野遺跡の東約750mには国史跡である水池土器製作遺跡（6）が所在する。

近世参宮街道もまたこの台地の形状に合せて設けられ、現在においてもこの参宮街道の両脇に集落が展開している。

また、かつて4遺跡を含む明和町南東部から玉城町北西部にかけての一帯は有爾郷と呼ばれ、台地の粘性に富む基質の特徴を生かした土器づくりのさととして知られていた³⁾。産業としての土器づくりは、現在となってはすでに衰退しているものの、明和町内には伊勢神宮への土器供給のため今も1社が土器生産を担っており、その火が途絶えたことはない。

遺跡周辺の植生としては、広域に広がるヤブツバキクラス域と呼ばれる常緑広葉樹林域にあり、開発されていない台地上にはクリやコナラなどを中心とした雑木林が今も点在する。また、町内の中央部の笛笛川周辺の湿地には、国天然記念物に指定された斎宮のハナショウブ群落が存在する。

【註】

- 1) 明和町2004『明和町史』史料編 第一巻 自然・考古
- 2) 明和町域の台地は中位面と高位面に対比され、斎宮が所在する中位面を斎宮面、高位面を明星面と呼称している（註1）。
- 3) 有爾郷の「う」は土器を表す「はに」がなまつしたものと考えられており、土器づくりを専門に行う人たちが住んでいたと考えられている。（明和町斎宮跡・文化観光課2014『さいくうあと通信（2）』第14号）

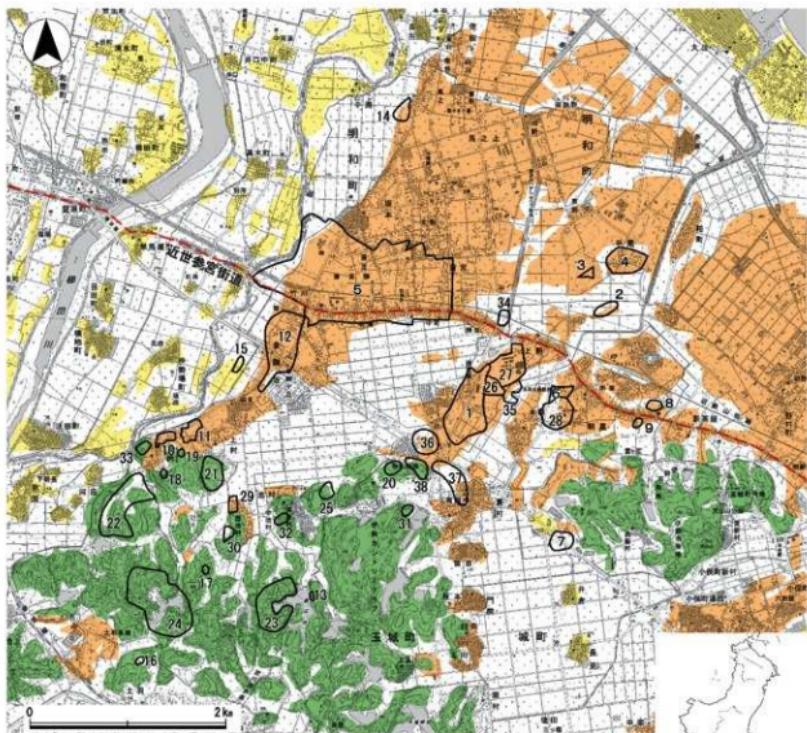
第2節 歴史的環境

（1）旧石器・縄文時代

この地域の旧石器時代から縄文時代初めにかけての代表的な遺跡として、玉城町カリコ遺跡（7）や伊勢市ママ田遺跡が挙げられる。多量のナイフ形石器、尖頭器、剥片などが採集されており、この地域の中核的な石器製作遺跡と考えられている¹⁾。町内の台地から丘陵部にかけては、上述2遺跡を中心に、キャンプサイト的にごく短期間に生活をしていたと

考えられる遺跡が、明星牛場C遺跡（8）、須磨ヶ広遺跡（9）、コドノA遺跡（10）、コドノB遺跡（11）など、多数存在する。北野遺跡（へべら地区）、曾祢崎遺跡でも石器の採集が認められている。

この地域で採取される石器は、圧倒的にチャート製のものが多い。近くに松阪礫層が存在するため、石器の素材となるチャートが容易に手に入る地域であったと考えられる。一方で、サヌカイト製、下呂石製のものが若干見られることから、近畿地方、東



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1. 北野遺跡 | 9. 須磨ヶ広遺跡 | 17. 高塚1号墳 | 25. 戸峯A遺跡 | 33. 岩内城址 |
| 2. 曾祢崎遺跡 | 10. コドノA遺跡 | 18. 大塚1号墳 | 26. 古塚遺跡 | 34. 丁長遺跡 |
| 3. 鯛尾城跡 | 11. コドノB遺跡 | 19. 神前山1号墳 | 27. 安養寺跡 | 35. 中畠遺跡 |
| 4. 平尾遺跡 | 12. 金剛坂遺跡 | 20. 塙場古墳群 | 28. 黒土遺跡 | 36. 堀田遺跡 |
| 5. 斎宮跡 | 13. 斎宮池遺跡 | 21. 天王山古墳群 | 29. 西村遺跡 | 37. 発シA遺跡 |
| 6. 水池土器製作遺跡 | 14. 粟垣内遺跡 | 22. 河田古墳群 | 30. 愛塙遺跡 | 38. 塙場遺跡 |
| 7. カリコ遺跡 | 15. 寺塙内遺跡 | 23. 斎宮池古墳群 | 31. 有爾中城址 | |
| 8. 明星牛塙C遺跡 | 16. 権現山2号墳 | 24. 上村池古墳群 | 32. 池村城址 | |



第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000) 国土地理院「松阪」「明野」より作成

海地方との交流があったことも認められる。

縄文時代の遺跡としては、金剛坂遺跡（12）、斎宮池遺跡（13）、栗垣内遺跡（14）などがある。

（2）弥生時代

前期の主な遺跡としては、金剛坂遺跡、コドノB遺跡が挙げられる。中でも、金剛坂遺跡は、東京国立博物館で所蔵されているバレススタイル壺や、「金剛坂型土器」と呼ばれる前期の亜流遠賀川系土器などが出土したことが知られ³¹、弥生文化が南伊勢地域へと伝播したルート上の遺跡という位置づけがなされている³²。曾祢崎遺跡においても、遠賀川系や亜流遠賀川系土器が出土している³³。

中期の主な遺跡としては、斎宮跡（古里地区）、寺垣内遺跡（15）が挙げられる。

後期には、大規模な集落の存在が確認されており、北野遺跡では100棟以上の堅穴建物や方形周溝墓が見つかっている³⁴。

（3）古墳時代

古墳時代に入ると、玉城丘陵周辺には多数の古墳が造営されるようになる。明和町内には519の古墳が存在し、県下有数の古墳の群在地である³⁵。ただし、明和町内に存在する519の古墳の95%までは、円形ないしは辺長が15mに満たない円墳ないしは方墳で、6世紀後半から7世紀前半にかけて造営されたものである。

古墳時代前期の古墳は、櫛田川流域、多気町・明和町域では確認されていない³⁶。この地域の古墳の初現は、櫛田川流域における5世紀前半の大型方墳である權現山2号墳（多気町）（16）とされている。その後、5世紀後半には玉城丘陵に首長墓級の大型帆立貝式前方後円墳の高塚1号墳（17）、大塚1号墳（18）、神前1号墳（19）が造営される。

6～7世紀には、玉城丘陵上に小規模な古墳群が造営される。埴場古墳群（20）、天王山古墳群（21）、河田古墳群（22）（多気町）、斎宮池古墳群（23）、上村池古墳群（24）などがそれにあたる。

（4）古代・中世

4遺跡を含む有爾郷と呼ばれる一帯は、古くより

土器づくりが盛んで、古代より斎宮や伊勢神宮の活動を支える重要な場所であったと考えられる。

これまでの調査において、三重県内で土師器焼成坑が見つかった遺跡は27遺跡あり、土師器焼成坑の総数は600基を越えているが、そのうちの20遺跡、約540基がこの明和町・有爾郷に集中して確認されている（第1表）。中でも、多くの土師器焼成坑が確認されている北野遺跡、戸峯遺跡（25）、古堀遺跡（26）、水池土器製作遺跡、安養寺跡（27）は、土器生産の中心地であったと考えられている。これらの遺跡において、土師器の生産は6世紀中頃から8世紀末に集中している。斎宮や伊勢神宮への供給はその後も継続されているが、9世紀以降の明確な構造の調査事例は今のところ少なく不明な点が多い³⁷。

古代の伊勢国には、東海道から分岐し伊勢平野を南下して、斎宮・伊勢神宮を経て志摩国へ至る官道、いわゆる「古代伊勢道」が通っていた。この官道は、斎宮跡及び丁長遺跡で確認されている³⁸。丁長遺跡で確認された古代伊勢道は、延長約37m分で、西北西から東南東（E15° S）方向に直線的に伸びる。道路幅は、両側側溝の芯々間で約9.4m、路面整形の痕跡は認められていない。これは斎宮跡の事例と一致している。

丁長遺跡以東の延長部分については、かつては斎宮跡中央付近の竹神社から南下し、明和町有爾郷集落を通過し、斎宮跡の南東約1.5kmに所在する大仏山丘陵内の谷筋をたどって離宮院へ至る経路が想定された³⁹。その後、斎宮跡の調査成果から、明星付近で南下して大仏山丘陵を越えて東折し、離宮院へと向かうルートが想定されている⁴⁰。

平安時代以降になると、上述のような土師器焼成坑は確認されなくなるが、水池土器製作遺跡に隣接する黒土遺跡（28）では平安時代末頃の土器焼成に関する構造が見つかっている⁴¹。さらに、外山遺跡では、近世の熔炉や羽釜などを焼くための粘土を備蓄した土坑が見つかっており、近世まで土師器生産が行なわれていたことが確認されている⁴²。つまり、中世以降は伊勢神宮への「奉仕」的生産から、商品土器の生産へと発展し、いわゆる「南伊勢系土器」の中心的生産地として土器生産が継続されたものと考えられる⁴³。

鎌倉～室町時代の遺跡としては、西村遺跡（29）・愛場遺跡（30）で、集落の一部が明らかになっている¹⁵⁾。また、室町時代には室町幕府の祈願所であつたとされる安養寺跡がある。成立期は永仁5年（1297）とされ¹⁶⁾、伊勢国司北畠氏の保護を受けた、当時伊勢国内有数の寺院であったとされる¹⁷⁾。寺院をめぐる幅4～5m、深さ2～3mの堀も確認されており、寺域の東西幅は約170mであった大寺院であったと考えられる¹⁸⁾。

明和町内にある中世城館は、鱗尾城のほか大淀城、佐田城、湯浅城址、斎宮城、下御系中村城、上村城、有爾中城、池村城、岩内城の10箇所がある¹⁹⁾。このうち有爾中城（31）、池村城（32）、岩内城（33）は土塁や堀切が残っているものの、それ以外は平坦地に築かれたもので、現在は宅地や農地になっている。

【註】

- 森田幸伸1990「大仏山とその周辺のナイフ形石器について」『研究紀要』1号・三重県埋蔵文化財センター
- 明和町2004「明和町史」資料編 第1巻自然・考古
- 三重県埋蔵文化財センター2008「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより」第6号
- 三重県埋蔵文化財センター1997「曾祢跡遺跡（第2次）・曾祢古墳群」
- 三重県埋蔵文化財センター1996「北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター1996「北野遺跡（第5次）発掘調査概報」
- 註2) に同じ
- 註2) に同じ
- 水泡土器製作遺跡は、土師器焼成坑のほか、掘立柱建物4棟、堅穴建柱3基、粘土層といった土器生産に伴う一連の工程に関連する施設が描かれている。（明和町教育委員会・三重県教育委員会1977「水泡土器製作址」「斎王宮址・広城町市村塙道路調査」）
- 三重県埋蔵文化財センター2007「丁長遺跡（第2次）発掘調査報告書」
- 足利健亮1988「大和から伊勢神宮への古代の道」「探訪古代の道」第1巻 法藏館
- 足利健亮1988「平安京から伊勢神宮への古代の道」「探訪古代の道」第2巻 法藏館
- 杉谷政樹1997「古代官道と斎宮跡について」『研究紀要』第6号・三重県埋蔵文化財センター
- 註2) に同じ
- 註2) に同じ
- 伊藤裕俊1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号・三重県埋蔵文化財センター
- 三重県埋蔵文化財センター1990「外山遺跡」「平成元年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財調査報告－第一分冊－」
- 三重県教育委員会1983「西村遺跡・愛場遺跡」「昭和57年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘報告書」
- 註2) に同じ
- 三重県埋蔵文化財センター2006「北畠氏とその時代」第25回 三重県埋蔵文化財展図録
乾保也はか2016「安養寺跡を掘る－安養寺跡発掘調査概要」明和町
- 註2) に同じ
- 註2) に同じ

第1表 三重県内土師器焼成坑確認遺跡

遺跡名	所在地	基數
西ヶ谷遺跡	四日市市東坂部町	7
山奥遺跡	四日市市羽治町	3
孫吉房遺跡	四日市市西坂部町	3
小沢七造跡	四日市市小牧町	5
今山遺跡	鈴鹿市高岡町	1
斐庭遺跡	鈴鹿市高岡町	1
平少遺跡	鈴鹿市平本町	1
岡原遺跡	鈴鹿市大野町	1
高岡村大垣内遺跡	津市城山	16
天王寺北瀬古遺跡	松阪市御野大花町	9
西ヶ谷遺跡	松阪市御野下之町	1
新町遺跡	松阪市木見田町	1
北野遺跡	多気郡御在所町貴子・明星はか	228
水泡土器製作遺跡	多気郡御在所町明星	29
上ノ山遺跡	多気郡御在所町明星	4
本郷遺跡	多気郡御在所町明星	5
堀田遺跡	多気郡御在所町有賀中	29
曳九A遺跡	多気郡御在所町有賀中	6
曳九B遺跡	多気郡御在所町有賀中	16
坦塚（鬼シ）遺跡	多気郡御在所町有賀中	6
片谷C遺跡	多気郡御在所町池村	3
戸安廻塚	多気郡御在所町池村	133
大木A遺跡	多気郡御在所町池村	2
川口口遺跡	多気郡御在所町金輪原	1
金輪坂遺跡	多気郡御在所町金輪坂	3
舟塚跡	多気郡御在所町舟登	3
御内遺跡	多気郡御在所町御内上	2
武D遺跡	多気郡御在所町池村	5
御前崎遺跡	多気郡御在所町上野	3
長ノ邱B遺跡	多気郡御在所町有賀中	2
安養寺跡	多気郡御在所町上野	32
古塙遺跡	多気郡御在所町上野	63
仲井遺跡	多気郡御在所町上野	15
武古遺跡	度会郡玉城町度会	3
カリコ遺跡	度会郡玉城町度会	11
魂之里遺跡	名張市夏見	1

【文献】

- 三重県教育委員会1973「昭和47年度県営園場整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 三重県教育委員会1981「昭和55年度県営園場整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 三重県教育委員会1985「昭和59年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所1979「史跡斎宮跡発掘調査報告書」
- 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所1983「史跡斎宮跡発掘調査報告書」
- 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1991「平成2年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター1994「天花寺北瀬古遺跡（第1次）兼御寺北浦遺跡発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター2000「高茶屋大垣内遺跡」
- 三重県埋蔵文化財センター2007「小北浦遺跡発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター1992「本郷廻塚（第2次）・曲里中遺跡」
- 三重県埋蔵文化財センター1995「北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター1996「曾祢跡遺跡（第5次）発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター1996「曾祢跡遺跡発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター2000「外山遺跡」「片谷C遺跡」
- 三重県埋蔵文化財センター2010「岡田遺跡発掘調査報告書」
- 三重県埋蔵文化財センター1990～1997「三重県埋蔵文化財センター年報」1～8
- 三重県埋蔵文化財センター1998～2019「三重県埋蔵文化財年報」平成9年～平成30年度
- 四日市市埋蔵文化財調査会1996「西ヶ谷遺跡」
- 四日市市教育委員会2002「西ヶ谷遺跡4」
- 四日市市教育委員会2003・2004「山奥遺跡I」「山奥遺跡II」
- 鈴鹿市考古博物館2008「境谷遺跡第2次発掘調査概要報告書」
- 松阪市考古博物館2013「北山遺跡（第19・22次）」
- 松阪市考古博物館1997「新田町遺跡・御道跡・唐鏡遺跡埋蔵文化財調査報告書」
- 名張市遺跡調査会1991「魂之里遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群」
- 明和町2004「明和町史」資料編第1巻自然・考古
- 三重県2004「三重県史」資料編考古2
- 皇學館大學考古學研究会1986「土師器とその窯明和町を中心として」

第III章 調査の方法

第1節 調査区の設定

調査区は農業用水管の架け替え工事によって影響を受ける範囲を中心に設定した（第1図）。特徴としては、農業用水管を敷設する箇所の掘削となるため、幅1m前後の細長い調査区を道路脇に設けていることである。工事立会調査であるため、調査後に埋戻しを行うことなく、すぐに敷設工事が行われた。

北野遺跡（第12次）は、面積97.2m²（幅1.2m、総延長81m）である。工事立会調査であったためグリッドについては設定せず、基準ピンを調査区内に数箇所設置し、それを基にしながら記録作業を進めた。

曾祢崎遺跡（第3次）は、調査総面積が132.2m²であった。調査区が3つあるため、A地区・B地区・C地区として区別して扱った。A地区・B地区については、前者面積が50.6m²（幅1.0m、延長50.6m）、後者面積が41.6m²（幅1.0m、延長41.6m）であった。グリッドは設定せず、アスファルト上に25m間隔で設けられた用水管布設工事用の基準ピンを利用

して記録作業を進めた。C地区については面積が約40m²（幅1~1.4m、延長34m）であった。北野遺跡（第12次）と同様に、グリッドは設定せず調査区内に設置した2箇所の基準ピンを基にしながら記録作業を進めた。

曾祢崎遺跡（第4次）は、面積が約37m²（幅1~1.4m、延長33m）であった。北野遺跡（第12次）と同様の方法で記録作業を進めた。

鱗尾城跡については、面積が約42m²（幅0.9~1.6m、延長45m）であった。調査区四隅に基準ピンを設置し、それを基にしながら記録作業を進めた。グリッドは設定しなかった。

平尾遺跡は、調査総面積が88.4m²であった。A地区とB地区に分かれ、幅は両地区とも1m、延長はA地区44.4m、B地区44mであった。鱗尾城跡と同様の方法で記録調査を進めた。グリッドは設定しなかった。

第2節 挖削

現地調査では、まず造成土（アスファルト、表土、碎石を含む）・旧耕作土を重機で除去し、包含層に達した際には遺物を採取しながら慎重に遺構面まで

掘り下げた。掘削土はダンプトラックで搬出した。その後、人力によって順次遺構の検出作業を行った。遺構検出後、それぞれの遺構を人力で掘削した。

第3節 遺構番号の付与

現場では、すべての種類の遺構に通し番号で遺構番号を付与した。ただし、北野遺跡においては、第12次調査において検出された遺構であることが分かるように1201から順に1200番台からの番号を付与す

ることにした。

なお、曾祢崎遺跡については、溝状遺構や土坑状遺構を確認したが、いずれも遺物を伴わなかつたため、遺構番号を付与することはなかった。

第4節 写真撮影

遺構および遺物の写真撮影には、ニコンD3300、D800Eを使用し、補助的にコンパクトデジタルカ

メラ（オリンパスTG-835）を用いて主に作業記録に活用した。

第IV章 北野遺跡（第12次）の調査

第1節 調査の概要

（1）既往調査の成果

北野遺跡では過去11回の調査が行われており、今回が第12次調査にあたる。

特筆すべきは、土師器焼成坑の総数で、これまで228基が確認されており、周辺の戸塚遺跡や古墳遺跡など、多くの土師器生産遺跡が斎宮周辺の地に集中していることである¹⁾。土師器の生産は6世紀中頃から8世紀後半にかけての250年間に及ぶ。他にも、弥生時代後期の100棟以上の堅穴建物や方形周溝墓が確認されている²⁾。第5次調査では、古墳時代初めの堅穴建物から銅鐸形土製品2個体が出土している。

今回の調査区は、平成29年度に行った第9次調査区の南西側延長部にあたる。この第9次調査においては、奈良時代の溝、土坑が確認されている³⁾。

（2）基本層序

調査区内では、地表面から遺構検出面まで0.2～0.3mほどの深さがあった。

調査区の基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層：表土・造成土1（農道整備時）

第Ⅱ層：造成土2（谷状地形の平坦化・造成）

第Ⅲ層：暗褐色シルト【遺構面】

第Ⅳ層：基盤層（褐色～明黄褐色シルト）

今回の調査区は、現況の農道整備時に大規模な造

成を受けたものと考えられ、およそ半分ほどの面積が基盤層に及ぶまで削平されている。そのため、第1層（造成土1）の直下が第Ⅳ層（基盤層）となってしまっており、検出された堅穴建物や溝は遺構上部の情報を失っていた。

また、調査区中には谷状の落ち込みが見られる地形となっており、第Ⅱ層（造成土2）はその谷状地形を造成した埋土となっていた。埋土には微量に遺物が含まれていた。現況の農道整備時より古い時期に行われた造成である。

表土から基盤層にかけての漸移層が第Ⅲ層にあたる。遺構のあった主な時代の遺構面にあたるものと考えられる。第Ⅲ層が確認された場所は調査区の一部のみであった。

第Ⅳ層は基盤層にあたる。褐色～明黄褐色のシルトで砂礫を含まない均質な土質である。

【註】

- 1) 上村安生「土器製作遺跡概要」『三重県史』資料編考古2
2008
- 2) 三重県埋蔵文化財センター1991『平成2年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告 北野遺跡』第2分冊
三重県埋蔵文化財センター1996『北野遺跡（第5次）発掘調査概報』
- 3) 三重県埋蔵文化財センター2018『安養寺跡（第8次）・古墳遺跡（第9次）・北野遺跡（第9次）・露越遺跡（第10次）発掘調査報告-多気郡明和町上野・斎宮-』

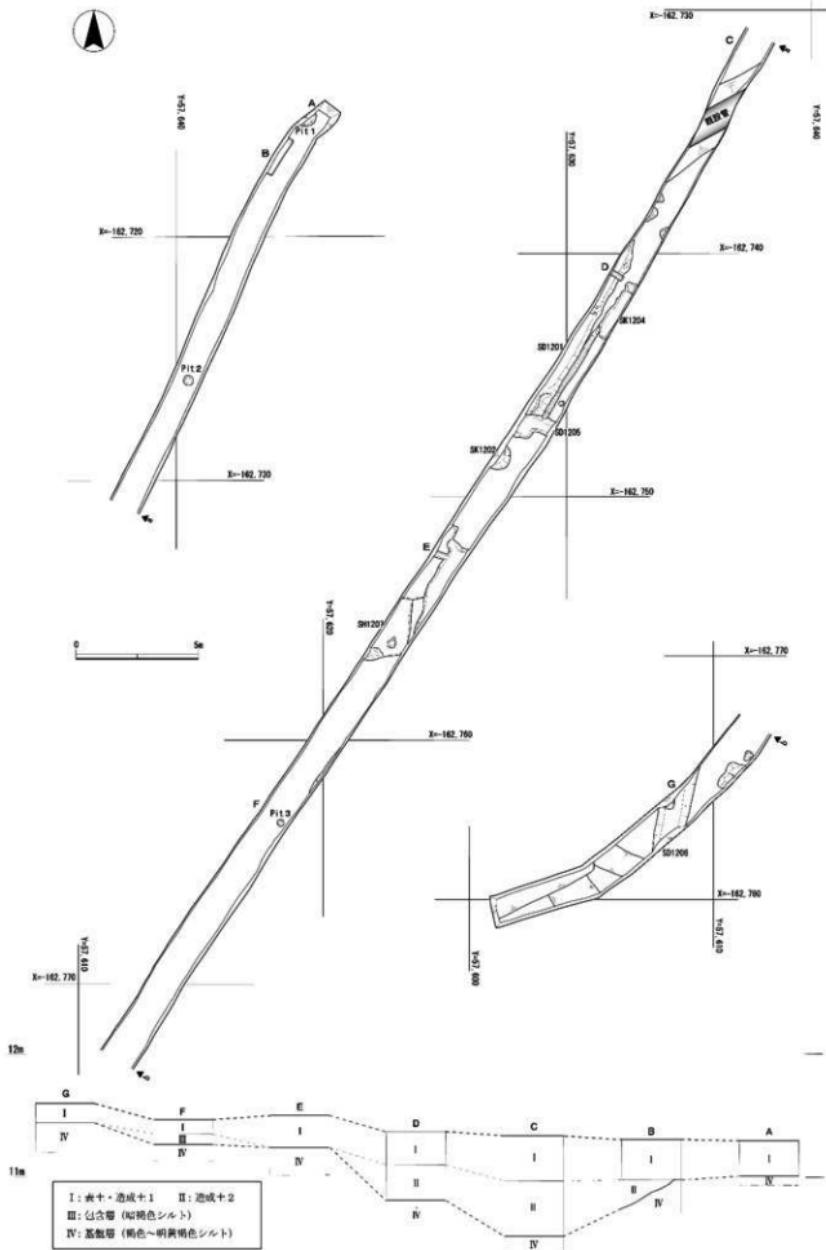
第2節 遺構

（1）堅穴建物

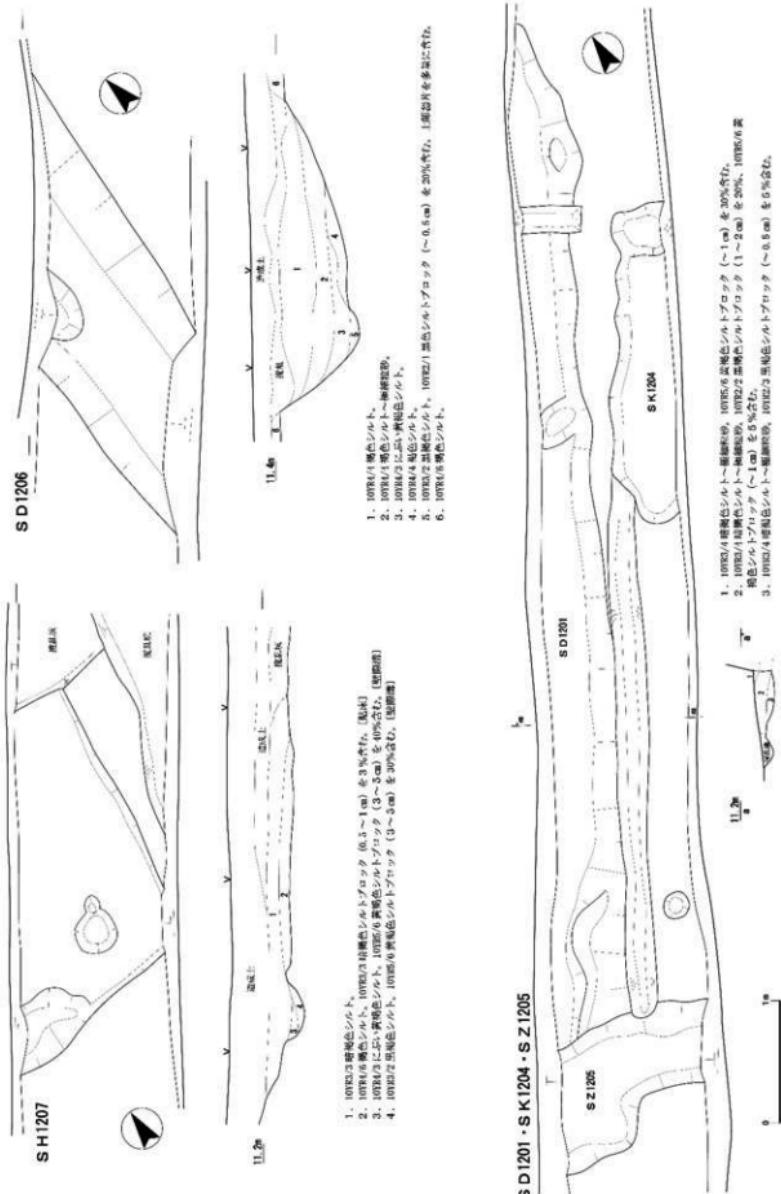
S H1207（第4図） 調査区の中央付近で検出された方形の堅穴建物である。調査区東壁・西壁にかかるため全体の規模は不明である。建物の軸は正方位に近い。遺構の深さは約0.2mであるが、削平を受けているため遺構上部の情報を欠く。

堅穴建物の南側壁には、幅約0.4m、深さ約0.1mの壁周溝とみられる溝が確認された。ただし、一部の検出にとどまり全周しない。壁周溝の埋土から径1～2mmの炭化物を確認した。第2層にあたる土層は、整地あるいは貼床にあたるものと考えられる。

また、床面からは径約0.4m、深さ約0.15mのピットが確認された。位置や規模から見て堅穴建物の主



第3図 北野遺跡(第12次)調査区平面図・土層柱状図 (1 : 200, 1 : 40)



第4図 北野遺跡(第12次)調査遺構平面図・土層断面図 (1 : 40)

柱穴にもなり得るピットであるが、ピットの中央を樹木の根が貫通しており、埋土の確認はできなかつた。

遺物の出土量は少なく、壁周溝埋土から明褐色の土師器細片が出土したのみである。そのため、遺構詳細時期の比定は難しい。しかしながら、このSH1207を切る擾乱坑から古墳時代後期から古代前半と思われる土師器甕が出土しており、SH1207内の遺物が混入した可能性も考えられる。

(2) 土坑

S K1202 (第3図) 調査区の中央付近で検出された径約1m、深さ約0.05mの円形と思われる土坑である。調査区東壁にかかるため全体像は不明である。

埋土からは土師器が出土しているが、細片のため図化できなかった。遺構の詳細な時期については不明である。

S K1204 (第4図) 調査区の中央付近で検出された方形と思われる土坑である。遺構の長さは約2m、深さは約0.15mである。調査区西壁にかかるため、全体の規模は不明である。

遺物の出土量は少なく、土師器細片が出土したのみである。そのため、遺構の詳細な時期については不明である。

S Z1205 (第4図) 調査区中央付近で検出された不整形の落ち込みである。SD1201を切る。

遺構の埋土はブロック土の混じる單一土層で、風倒木痕である可能性が高い。埋土からは土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。遺構の詳

細な時期については不明である。

(3) 溝

S D1201 (第4図) 調査区の中央付近で検出された深さ約0.1~0.2mの溝である。調査区西壁に沿つて南北方向にのびているが、溝の西側約半分は西壁にかかる上、東側壁の多くは擾乱溝に切られ、南端についてもSK1205に切られるため、全体像については不明である。北方向へ落ち込んでいるため、溝機能としては排水が考えられる。

遺物の出土量は少なく、土師器細片が出土したのみである。そのため、遺構の詳細な時期については不明である。

S D1206 (第4図) 調査区の南端部付近で検出された幅約1.2m、深さ約0.7mの南北方向にのびる溝である。

調査区西壁付近では、底部がより深く窪んでいる箇所があり、そこから土器が集中的に出土した(第5層)。土器の廃棄が考えられる。埋土の堆積状況や埋土の土色の違い等から、第1~4層と第5層の埋土の堆積には時間差があったものと考えられる¹⁾。しかしながら、第5層の出土遺物と第1~4層の出土遺物には大きな時期差ではなく、ほぼ同時期の小皿群を中心とした土師器が出土している。出土遺物から平安時代の溝と考えらえる。

【註】

1) 第1~4層が比較的似通った褐色の土層であるのに対して、この第5層のみが黒褐色の土層であり別の遺構の可能性がある。また、第4回においては、土色の違いから第3層と第4層を分け表示しているが、同一層の可能性が高い。

第3節 遺物

(1) 溝 (第5図1~16)

S D1206 (第5図1~16) 出土した遺物はいずれも土師器で、遺存状態が悪いものがほとんどで、図面復元が困難であった。

以下、第1~4層と第5層とに分けて報告するが、2者には大きな時期差ではなく、混じり込みの遺物を除けば、すべて11世紀代に位置づけられるものと考えられる。

<第1~4層> 1~5は、土師器小皿である。浅く平たい形状で、器壁が厚い。3と4は同一個体である可能性もある。

6は土師器杯である。器壁はやや厚めで底部より緩やかに立ち上がり、口縁端部には強いヨコナダニによる凹線が見られる。11世紀前半に位置づけられるものと思われる。

7・8は土師器皿である。7の体部外面には、植物圧痕が線刻のような跡が見られる。8の器壁は厚

く、口縁端部には強いナデにより凹む。

9は土師器甕である。頸部から口縁部にかけての器壁は厚く、口縁端部は面をもち上部へとわずかにつまみ上げられている。8～9世紀にあたるもので、埋土に混入したものと考えられる。

<第5層> 10～14は、土師器小皿である。浅く平たい形状で、器壁が厚いものが多い。

15は土師器杯である。全体的に器壁が厚く、体部中位でやや薄くなるが、口縁部で肥厚する。11世紀前半のものと考えられる。

16は土師器碗である。体部外面には粘土組接合痕がやや急な角度で見られる。太めの粘土紐の巻き上げによって整形されていることがわかる。11世紀前半の粗製椀であると思われる。

(2) 搅乱坑および表土 (第5図17～20)

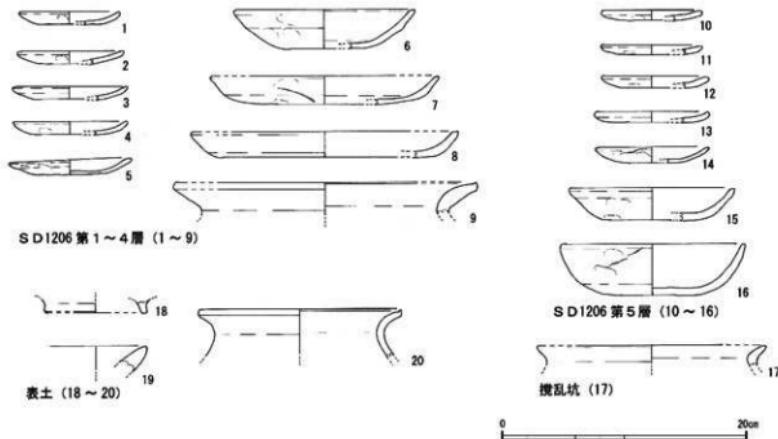
17は土師器甕の口縁部片である。SH1207を切る搅乱坑にて見つかった。頸部の屈曲は緩やかで、頸部から口縁部にかけての器壁は厚い。古代前半の甕の様相を見せるが、口縁端部の摩耗が激しく、また小片であるため、詳しい時期の比定に決め手を欠く。

18は土師器杯の高台片である。高台の断面は台形で「ハ」の字に開く。

19は甕または盞と思われる土師器の口縁部小片である。器壁は非常に厚く、端部は面を持たず尖り気味に仕上げられる。古墳時代後期から古代前半のものであろう。

20は土師器甕である。頸部の屈曲は緩やかで体部から口縁部にかけて滑らかに外反する。口縁端部は外斜面をなし、わずかに上方に摘み上げられる。

8世紀代のものと考えられる。



第5図 北野遺跡(第12次)調査遺物実測図 (1 : 4)

第2表 北野遺跡(第12次)調査 遺構一覧表

遺構名	種別	規模 (m)	深さ (m)	主な出土遺物	時期	備考
S D1201	溝	0.6以上 × -	0.2	土師器	不明	排水機能?
S K1202	土坑	1.0 × -	0.05	土師器	不明	
S K1204	土坑	2.0 × -	0.15	土師器	不明	
S Z1205	落ち込み	1.0 × -	0.1	土師器	不明	風倒木痕?
S D1206	溝	1.2 × -	0.7	土師器	平安時代	
S H1207	竪穴建物	3.0以上 × -	0.2	土師器	古代前半以前	壁周溝あり

※規模や深さについては代表的な数値を記入している。

※遺構番号1203は欠番

第3表 北野遺跡(第12次)調査 出土遺物一覧表

【凡例】

※持図番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

※胎土・釉薬の色調は『新版 標準色鉛』に掲載。

※土器・陶器等の残存度については、復元される口縁部・底部等を12分割したうちの残存度を記している。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかつたものである。

押送番号	実測番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	文様・調整	色調	残存度	備考
1	002-03	S D1206	土師器	小皿 器高	8.0 1.0	外: ユビオサエ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/3	口縁部 3/12	第1～4層 壺み大きい
2	002-02	S D1206	土師器	小皿 器高	8.4 1.0	外: ユビオサエ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	灰白10YR8/2 部分的に浅黄褐10YR8/3	口縁部 1/12	第1～4層
3	001-07	S D1206	土師器	小皿 器高	9.0 1.0	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	灰2.5YR8/2 部分的に黒斑あり	口縁部 3/12	第1～4層 4と同じ可能性あり
4	001-06	S D1206	土師器	小皿 器高	9.0 1.0	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 3/12	第1～4層 3と同じ可能性あり
5	001-05	S D1206	土師器	小皿 器高	9.6 1.3	外: ユビオサエ・ナデ 内: ナデ	浅黄褐10YR8/4	口縁部 8/12	第1～4層
6	001-03	S D1206	土師器	杯 器高	14.2 3.0	外: ユビオサエ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/3	口縁部 2/12	第1～4層
7	001-04	S D1206	土師器	皿 器高	- 2.3	外: ユビオサエ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	外: 浅黄褐10YR8/4 内: 浅黄褐10YR8/3	口縁部 1/12	第1～4層、 植物圧痕?
8	002-01	S D1206	土師器	皿 器高	- 2.0	外: ユビオサエ・ヨコナデ 内: ヨコナデ	にぶい黄褐10YR7/3	口縁部 1/12	第1～4層
9	001-02	S D1206	土師器	甕	-	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/4	口縁部 1/12	第1～4層
10	003-02	S D1206	土師器	小皿 器高	約8.0 0.8	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/3	口縁部 1/12	第5層
11	003-03	S D1206	土師器	小皿 器高	約8.0 0.7	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐7.5YR8/3	口縁部 1/12	第5層
12	002-07	S D1206	土師器	小皿 器高	9.0 0.9	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	第5層、 やや歪みあり
13	003-01	S D1206	土師器	小皿 器高	約9.0 0.8	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12	第5層
14	002-06	S D1206	土師器	小皿 器高	9.0 1.2	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/3	口縁部 2/12	第5層
15	002-05	S D1206	土師器	杯 器高	13.0 2.5	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	灰白10YR8/2	口縁部 2/12	第5層
16	002-04	S D1206	土師器	碗 器高	約14.5 4.0	外: ユビオサエ・ナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/3 部分的に黒斑有	口縁部 1/12	第5層
17	001-01	攢乱	土師器	甕	頭部径 -	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	浅黄褐10YR8/3	口縁部 小片	
18	003-05	表土	土師器	杯	高台径 -	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	標5YR6/6	高台部 1/12	
19	003-06	表土	土師器	甕?	- -	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	にぶい標7.5YR7/4	口縁部 小片	蓋?
20	003-04	表土	土師器	甕	口径 16.0	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	にぶい黄褐10YR7/4	口縁部 2/12	

第V章 曽祢崎遺跡（第3・4次）の調査

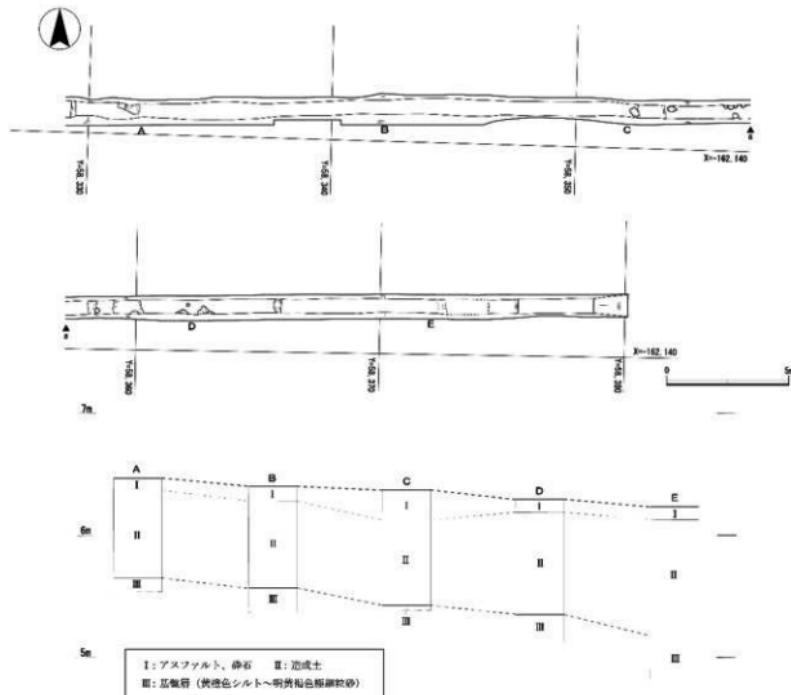
第1節 調査の概要

（1）既往調査の成果

曾祢崎遺跡では過去2回の調査が行われており、今回報告するのは第3・4次調査にあたる。

平成7年度に行われた第1次調査では、旧石器時代～奈良時代にかけての遺構・遺物が確認されている¹¹⁾。旧石器時代の遺物については、ナイフ形石器、楔形石器、角錐状石器のほか、多量の石核・片が出土している。こうしたことから一定期間の滞在の跡

が見出される。そして、古墳時代後期の遺構として、掘立柱建物1棟、土坑2基が認められ、中でも土坑1基からはミニチュア土器が出土しており、何かしらの祭祀に用いられた可能性が考えられる。さらに、飛鳥～奈良時代の遺構としては、堅穴建物2棟、掘立柱建物5棟、土師器焼成坑3基および多数の土坑、ピットが認められている。土師器焼成坑は7世紀後半～8世紀初頭に位置づけられ、その形態や分布から、土師器の大生産地である北野遺跡での生産が



第6図 曽祢崎遺跡（第3次）調査 A地区平面図・土層柱状図（1:200、1:40）

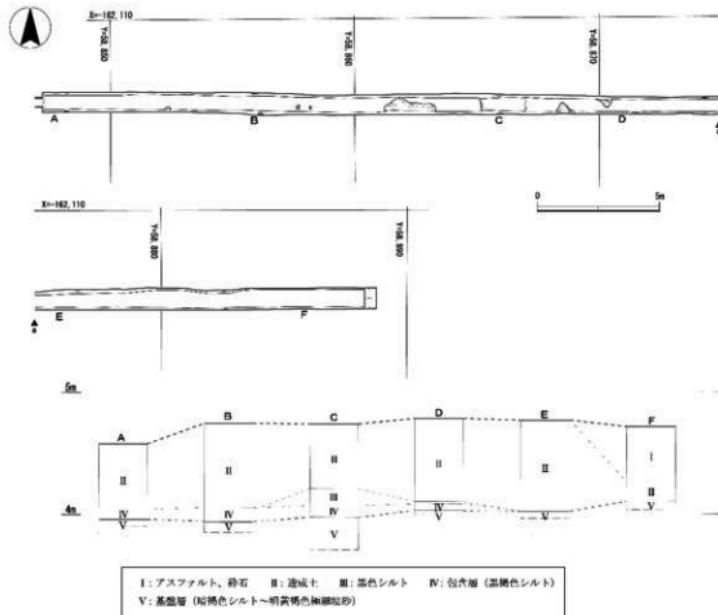
最盛期を迎える時期とも重なる。

翌平成8年度に行われた第2次調査では、弥生時代後期初頭の方形周溝墓2基、古墳時代末～飛鳥時代の古墳2基、竪穴建物1棟、掘立柱建物2棟などが確認されている²⁾。なお、遺構は認められなかつたが、旧石器時代の遺物が多量出土している。周辺には、カリコ遺跡（玉城町）、ママ田遺跡（伊勢市）を中心とした中小規模の旧石器時代の遺跡が存在しており、曾祢崎遺跡も中規模の遺跡として、一定期間の滞在の跡が見出される。

また、同時に行われた曾祢崎古墳群の調査では、刀、馬具、石突、玉類、須恵器などの副葬品が出土している。

【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター1996『曾祢崎遺跡発掘調査報告』
- 2) 三重県埋蔵文化財センター1997『曾祢崎遺跡（第2次）・曾祢崎古墳群』



第7図 曾祢崎遺跡(第3次)調査 B地区平面図・土層柱状図 (1 : 200, 1 : 40)

(2) 基本層序

調査区内では、地表面から遺構検出面まで0.8~1mほどの深さがあった。

第3次調査A地区 道路および農地の造成時に大規模な削平を受けており、造成土（第II層）直下が基盤層であり、遺構は上位の情報を持った状態で検出されている。A地区の基本層序は以下の通りである。

< A 地区 >

第I層：アスファルトおよび碎石

第II層：造成土

第III層：基盤層（黒褐色シルト～明黄褐色極細粒砂）

第3次調査B地区 一部が道路および農地造成時の削平によって基盤層まで削り込まれていたものの、大部分は基盤層の上面に黒褐色シルト層が確認された。これは表土から基盤層への漸移層にあたり、遺跡のあった主な時代の遺構面であったと考えられる。さらに一部の箇所においては、遺構面の上層にあたる黒色シルト層もレンズ状に残っていることが確認されている。B地区の基本層序は以下の通りである。

< B 地区 >

第I層：アスファルトおよび碎石

第II層：造成土（大きく2回の造成）

第III層：黒色シルト

第IV層：黒褐色シルト【包含層】

第V層：暗褐色シルト～明黄褐色極細粒砂（A地区的第III層にあたる）【基盤層】

第3次調査C地区 古代伊勢道が推定される場所にあたる。現況は畑地と道路の境界の法面で、基本層序は以下のとおりである。

< C 地区 >

第I層：表土

第II層：にぶい黄橙色土【耕作土】

第III層：黄橙色土【基盤層】

第4次調査区 地表面から遺構検出面まで1~1.2mの深さがあった。第4次調査区の基本層序は以下の通りである。

< 第4次調査区 >

第I層：耕作土

第II層：造成土

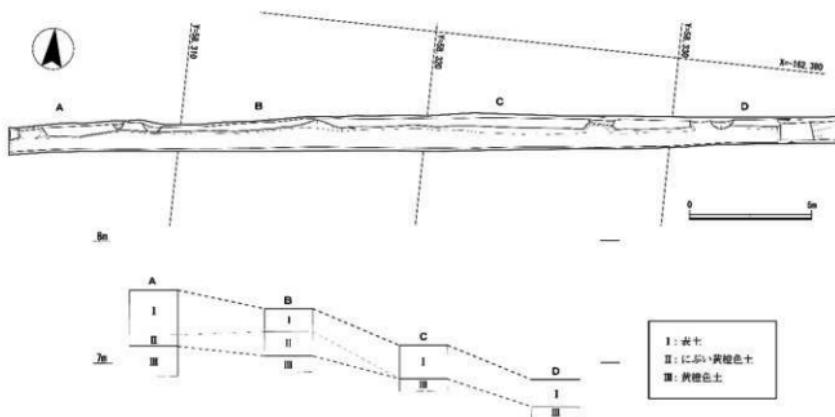
第III層：褐色土（粘性有）（砂礫を含む）

第IV層：黒褐色土（粘性有）【包含層】

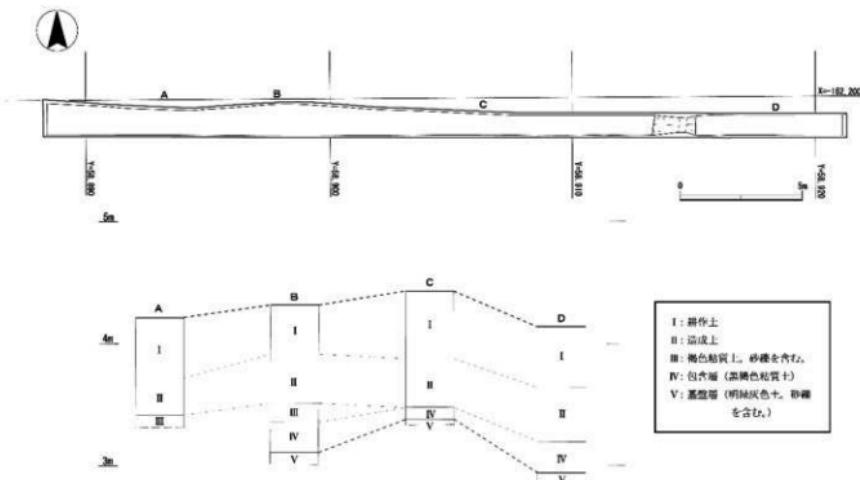
第V層：明緑灰色土（砂礫を含む）【基盤層】

【註】

- 三重県埋蔵文化財センター1996『曾祢崎遺跡発掘調査報告』
- 三重県埋蔵文化財センター1997『曾祢崎遺跡（第2次）・曾祢崎古墳群』



第8図 曾祢崎遺跡(第3次)調査 C地区平面図・土層柱状図 (1 : 200, 1 : 40)



第9図 曾祢崎遺跡(第4次)調査区平面図・土層柱状図 (1:200, 1:40)

第2節 遺構

(1) 第3次調査区A地区 (第6図)

A地区においては、溝状遺構、土坑状遺構、ピットが確認された。いずれも遺物を伴わなかった。

(2) 第3次調査区B地区 (第7図)

B地区においては、複数のピットと風倒木痕が確認されただけである。しかしながら包含層からはいくつかの遺物が出土した。

(3) 第3次調査区C地区 (第8図)

C地区においては、複数のピット・土坑（または溝）が確認された。いずれのピット・土坑（溝）も、調査区壁面にかかたり、調査区の南半分を占める近現代の搅乱構に切られたりして、遺構の全体像ははつきりしないものであった。また、いずれの遺構も遺物を伴わなかったため、遺構の時期を推定することは困難であった。

本地区は、從前より古代伊勢道の想定ルートにあたり、道路遺構の検出が予想されていた（第1図参

照）。しかしピット、土坑（溝）の間には関係性は見られず、また、土層では耕作土直下が基盤層となっていることから削平を受けた可能性があり、道路遺構の検出には至らなかった（第V章 参照）。

(4) 第4次調査区 (第9図)

第4次調査区においては、幅約1.8m、深さ約0.35mの溝1条のみが確認された。遺物は伴わず、遺構の時期を推定することは難しい。

遺構面にあたる第IV層（黒褐色土）からは多数の遺物が出土している。上限の遺物は古墳時代の土師器高杯で、下限は中世（14～15世紀）の土師器小皿であり、長期に渡って土地利用がなされていたものと考えられる。しかしながら、遺物の出土傾向をみると、7～8世紀代の土師器壺9個体が出土している一方でそれ以降の壺・鍋類の出土がないことや、中世以降の遺物が極端に少ないとから、古墳時代から奈良時代にかけて当地が特に盛隆していた可能性が考えられる。

第3節 遺物

(1) 第3次調査A地区 (第10図21)

21は土師器羽釜の鰐部である。包含層より見つかつた。小型の羽釜で、鰐部は体部と垂直に近い形で接続される。16世紀代のものと考えられる。

(2) 第3次調査B地区 (写真図版5)

写真図版5左上(番号無し)は土師器の底部と考えられる。甕の可能性を考えるもの機種は特定できない。包含層より見つかつた。幅約1cmの粘土紐が、底部外面から見て中心から左巻き螺旋状に巻き上げられている様子が明確に観察できる。遺物の詳細な時期については不明であるが、古代から中世のものである可能性が考えられる。

(3) 第4次調査 (第11図22~43)

包含層(黒褐色土) 22~24は土師器高杯である。いずれも古墳時代のものと考えられる。22は杯部片である。脚部が剥がれた中央部には刺突痕が見られる。23・24は脚部片である。ともに外面にはヘラケズリの跡が見られ表面は整っているが、ヘラミガキが施された様子は見られない。内面には爪または道具の当たり痕が見られる。23・24は22よりやや古く、古墳時代前期のものと考えられる。

25は土師器小皿である。器壁は薄く均一で、底部から口縁部にかけて立ち上がる。14~15世紀のものと考えられる。残存度が低く、口径はやや不確実であるが、同時期の同器種のものと比して小さい。

26は土師器碗の口縁部片である。7世紀代の粗製碗であると考えられる。体部外面には粘土紐接合痕が見られる。

27~29・31~36は土師器甕である。いずれも口縁部の特徴がおよそ共通しており、外反する口縁部の端部は面をなして上方に小さく摘み上げられている。すべて7~8世紀代に収まるものと考えられる。

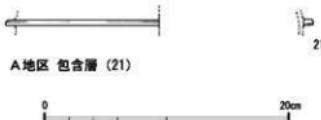
30は土師器甕または甕の口縁部片であると考えられる。口径は13cmで、器壁は薄く、口縁端部は大きく外反する。時期も土師器甕と同時期のものと考えられる。

37は須恵器杯身である。受部は体部中位に設けられ、たちあがりはやや内傾する。底部とたちあがりの器壁の厚さには大きな差はない。5世紀後半から6世紀前半にかけてのものと考えられる。

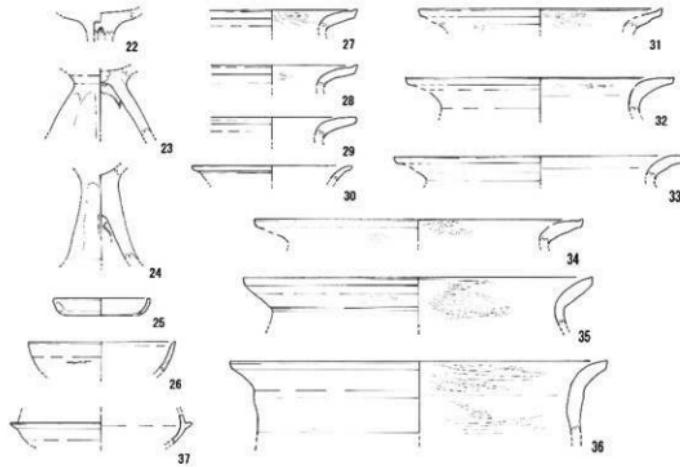
範囲確認調査包含層 38・39は土師器甕である。38は頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は面をなし上方に小さく摘み上げられている。7~8世紀代のものと考えられる。39は頸部から口縁部にかけて均一の厚さでまっすぐ外傾する。口縁端部はやや丸みを帯びつつ面をなす。38とほぼ同時期のものであると考えられる。

40・41は土師器台付甕である。40は体部下位の破片で中位にかけてまっすぐ外傾する。41は台部片で、わずかに内傾する。端部は内側に折り返しユビオサエによって厚さを調整したものと考えられる。いずれも古墳時代前期前半のものと考えられる。

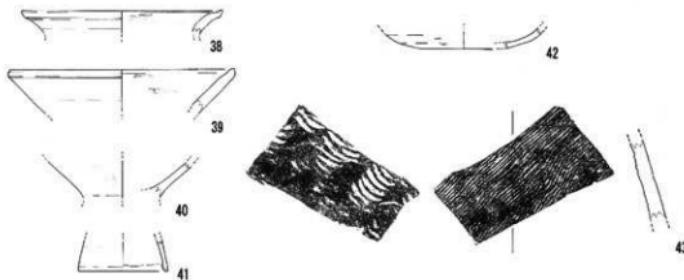
42・43は須恵器である。42は杯身または杯蓋の底部片(天井部片)である。底部(天井部)から体部にかけて緩やかに立ち上がる。43は甕の体部片である。外面の擬格子タタキの調整はカキメの後に平行タタキが施されてできた可能性が考えられる。いずれも小片であるため詳細な時期は不明である。



第10図 曽林崎遺跡(第3次)調査 遺物実測図(1:4)



黒褐色粘質土 (22 ~ 37)



範囲確認調査 (38 ~ 43)



第11図 曾祢崎遺跡(第4次)調査 遺物実測図 (1 : 4)

第4表 曾祢崎遺跡(第3・4次)調査 出土遺物一覧表

【凡例】

※実測番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

※胎土・釉薬の色調は『新版 標準土色帖』に拠る。

※土器・陶器等の残存度については、復元されるロ線部・底部等を12分割したうちの残存度を記している。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかったものである。

神岡 番号	実測 番号	調査次数 出し道構	種別	器種	法量 (cm)	文様・調整	色調	残存度	備考	
21	001-01	3次A区 包合層	土師器	羽釜	鉢部径 約24.0	外: ヨコナデ	にぶい黄橙10YR7/3	鉢部 1/12		
—	—	3次B区 包合層	土師器	甕?	—	外: ユビオサエ 内: ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	底部 小片	左巻き螺旋状 粘土織合痕	
22	001-01	4次 包合層	土師器	高杯	—	外: ヨコナデ・ナデ 内: ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	杯部 —	脚部剝離痕に刺突痕	
23	001-02	4次 包合層	土師器	高杯	—	外: 脚部ヨコナデ・ハラケズリ 内: ユビオサエ・ナデ	外: 黄灰2.5VA/1 内: にぶい黄橙10YR7/4	脚部 —		
24	001-03	4次 包合層	土師器	高杯	—	外: ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	脚部 —		
25	001-04	4次 包合層	土師器	小皿	口徑 8.0 器高 1.4	外: ユビオサエ・ナデ 内: ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12		
26	001-05	4次 包合層	土師器	碗	口徑 12.0	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	灰黄褐10YR6/2	口縁部 1/12		
27	002-04	4次 包合層	土師器	甕	—	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ・ナメハケ・ヨコハ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片		
28	002-05	4次 包合層	土師器	甕	—	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ・ヨコハケ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片		
29	002-06	4次 包合層	土師器	甕	—	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 小片		
30	001-06	4次 包合層	土師器	壺?	口徑 13.0	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 1/12	甕?	
31	001-07	4次 包合層	土師器	甕	口徑 —	外: ヨコナデ・ナナメハケ 内: ヨコナデ・ナメハケ・ヨコハ	灰白10YR8/2	口縁部 1/12		
32	002-01	4次 包合層	土師器	甕	口徑 頭部径	—	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ・ヨコハケ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	
33	002-03	4次 包合層	土師器	甕	口徑 —	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 1/12		
34	002-02	4次 包合層	土師器	甕	口徑 —	外: ヨコナデ・ナナメハケ 内: ヨコナデ・ナメハケ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12		
35	003-01	4次 包合層	土師器	甕	口徑 28.6 頭部径 24.0	外: ヨコナデ・ナナメハケ 内: 327.320.177.330.320	にぶい黄橙10YR6/4	口縁部 2/12		
36	003-02	4次 包合層	土師器	甕	口徑 31.0	外: ユビオサエ・ヨコナデ 内: ヨコナデ・ヨコハケ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12		
37	003-03	4次 包合層	須恵器	杯身	受部径 15.0 体部径 13.8	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	灰N6/～5/	体部 1/12		
38	004-03	4次 範型No.18	土師器	甕	口徑 約16.4	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ・ヨコハケ	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 1/12	黒褐色土	
39	004-04	4次 範型No.18	土師器	甕	口徑 約18.6	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ・ヨコハケ	にぶい黄橙10YR7/2	口縁部 1/12	黒褐色土	
40	004-01	4次 範型No.18	土師器	台付甕	—	外: ユビオサエ・ナナメハケ 内: ユビオサエ・ナナ	外: 浅黄2.5Y7/3 内: オリーブ黒S13/1	体部 小片	黒褐色土 内面全体に黒斑	
41	004-02	4次 範型No.18	土師器	台付甕	脚台径 約7.2	外: ヨコナデ 内: ユビオサエ・ナナ	外: にぶい黄橙10YR6/3 内: 淡灰10YR1/1	脚台部 1/12	黒褐色土 内面全体に薄く黒斑	
42	005-02	4次 範型No.21	須恵器	杯身?	—	外: ロクナデズリ 内: ユビオサエ・ヨコナデ	灰N6/～5/	底部 (大)H6 小片	杯蓋?	
43	005-01	4次 範型No.21	須恵器	甕	—	外: 縁格子タタキ 内: 同心円内當て具痕	灰N7/～6/	体部 小片		

第VI章 鱗尾城跡の調査

第1節 調査の概要

(1) 既往調査の成果

鱗尾城跡はこれまでに発掘調査が行われたことはない。過去の調査記録によると、「台地上に立地し規模不詳。土壘の一部が現存し、全長130m、幅2m、高さ0.4m」とある¹⁾。出土遺物の記録はない。また、鱗尾城を俗称「智積城」とし、智積寺氏の居所、半壇と記される²⁾。

(2) 基本層序 (第12図)

調査区内では、地表面から遺構検出面まで0.25~

0.4mほどの深さがあった。基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層：表土

第Ⅱ層：黒褐色土、粘性有【遺物包含層】

第Ⅲ層：黄褐色土、粘質有【基盤層】

【註】

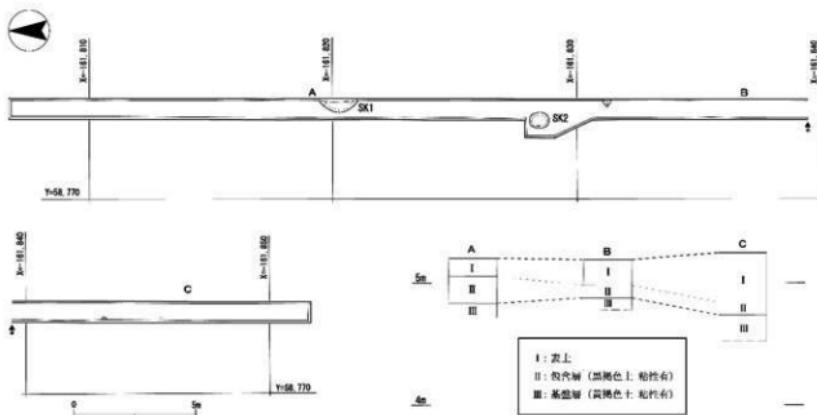
1) 三重県埋蔵文化財センター（1973年頃）（埋蔵文化財包蔵地調査カード「鱗尾城」）
2) 注1) に同じ

第2節 遺構

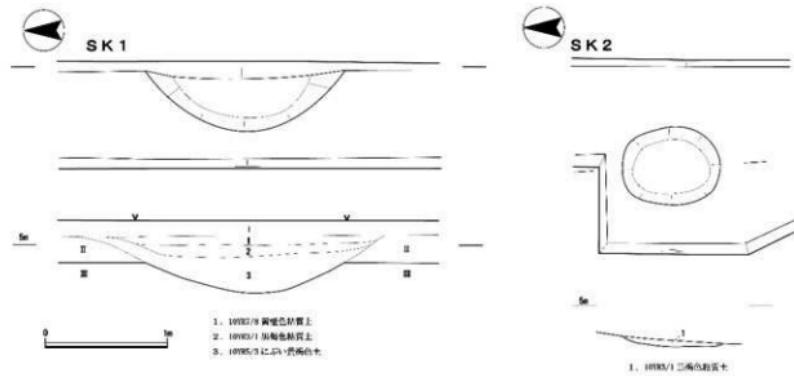
発掘調査区は遺跡の南側にあたり、土坑2基と小穴を確認した。

SK1 (第13図) 調査区中央や北側で検出された。第Ⅰ層底下から切り込み径約2.5m、深さ0.48mを測る。大半が調査区外に延びると思われ全様は

不明である。埋土から山茶碗や鉄絵鉢が出土した。
SK2 (第13図) 調査区やや南側で検出され径0.8m、残存深0.05mを測る。遺構上部は後世の削平を受けていることが予想される。遺物は確認できなかつた。



第12図 鱗尾城跡調査区平面図・土層柱状図 (1 : 200、1 : 40)



第13図 鱗尾城跡調査 造構平面図・土層断面図 (1 : 40)

第3節 遺物

本調査で山茶椀と陶器、また、範囲確認調査で山茶椀と土師器小片が出土した。

(1) 土坑 (第14図44~46)

SK 1 (第14図44~46) 44・45は山茶椀である。44は底部片で、高台の端部は接地面が広く押しつぶれた様子である。もみがら痕が数ヶ所にみられる。46は陶器鉄絵鉢の口縁部で口径は36cm程と推定される。口縁部の形から、第4小期から第5小期と推定されるが¹⁾さらに下る可能性がある。鉄絵は文字

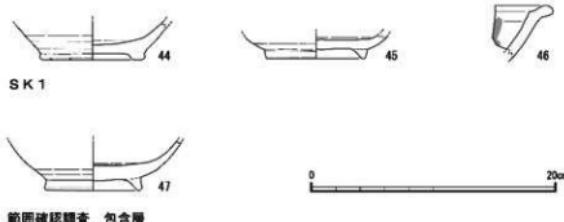
であろうか。

(2) 包含層 (第14図47)

範囲確認調査No.2 包含層 (第14図47) 47は山茶椀である。口縁部は認められないものの本調査も含め残存度が最も良い個体である。

【註】

1) 愛知県2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』



第14図 鱗尾城跡調査 遺物実測図 (1 : 4)

第5表 鰐尾城跡調査 遺構一覧表

遺構名	種別	規模 (m)	残存深 (m)	主な出土遺物	時期	備考
S K 1	土坑	径2.5	0.48	山茶椀・鉄鉢鉢	室町時代	
S K 2	土坑	径0.8	0.05	—	—	

第6表 鰐尾城跡調査 出土遺物一覧表

【凡例】

※挿図番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

※胎土・釉薬の色調は『新版 標準土色帖』に掲げる。

判明番号	実測番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	文様・調整	色調	残存度	備考
44	001-02	S K 1	陶器	山茶椀	底径 8.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y7/1	底部 6/12	もみがら痕
45	001-03	S K 1	陶器	山茶椀	底径 8.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y7/1	底部 3/12	
46	001-04	S K 1	陶器	鉄鉢鉢	口径 約36	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、鉄鉢	灰黄2.5Y6/2	口縁部 小片	
47	001-01	範囲確認調査No.2 包含層 (黒褐色土、粘質有)	陶器	山茶椀	底径 7.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：糸切り・ナデ	灰白2.5Y7/1	底部 完存	

第VII章 平尾遺跡の調査

第1節 調査の概要

(1) 既往調査の成果

平尾遺跡はこれまでに発掘調査が行われたことがなく、遺構遺物ともほとんど明らかになっていない。昭和46年の調査記録によると、遺跡は「周囲の水田よりわずかに高く、平尾集落を取り囲む形で畑地に所在する。薄手の土師器片がわずかに散布する。」とある¹⁾。遺跡の立地や遺物の散布範囲のみ分かっていた。遺物散布範囲は10,000m²に及び、土師器の他、須恵器や山茶碗、陶器、土鍾の散布が確認されている。

(2) 基本層序 (第12図)

調査区内では、地表面から遺構検出面までA地区

は1.00~1.15mほど、B地区は0.5~0.65mほどの深さがあった。

基本層序は以下の通りである。

第I層：アスファルト、碎石

第II層：黄褐色砂質土（客土）

第III層：オリーブ灰色砂質土

第IV層：黒褐色粘質土

第V層：灰色褐色粘質土

第VI層：明黄褐色粘土【基盤層】

【註】

1) 三重県埋蔵文化財センター1971『埋蔵文化財包装地調査カード 平尾遺跡』

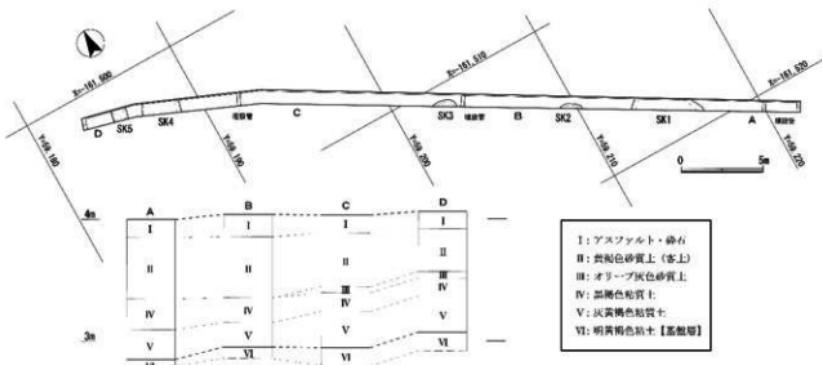
第2節 遺構

(1) A地区

土坑を5基確認した。SK2及びSK3はおよそ径1.4~1.5mほどの規模で梢円あるいは円形の土坑と推定される。それ以外は遺構の部分的な検出に過

ぎず調査区の両側に広がる全様は不明である。中に溝など、他の遺構の可能性が考えられるものもある。

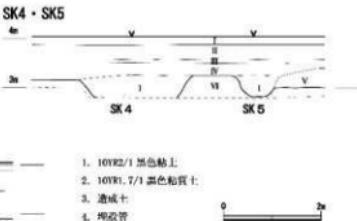
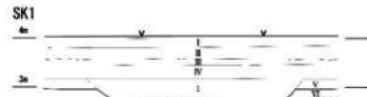
SK1 (第16図) 調査区東側で検出され最大幅約4.4m、深さ0.4m以上を測る。調査区北壁に向かい



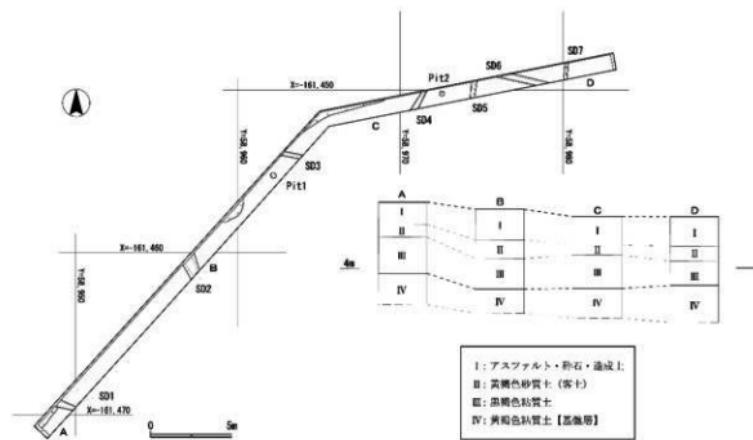
第15図 平尾遺跡調査 A地区平面図・土層柱状図 (1:300, 1:40)

て幅が狭まる平面形である。0.4m以深は未調査であるが、深さはおよそ0.7mまであるように思われる。A地区では最大規模で、土坑とすれば大型となる。遺物は認められなかった。

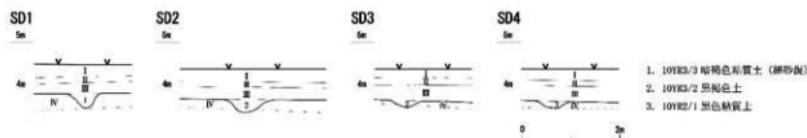
S K 4 (第16図) 調査区西側で検出され幅2.4m、深さ0.45m以上を測る。遺構壁の立ち上がりが急であり隣接するSK 5と類似する。土坑としているが



第16図 平尾遺跡調査 A地区SK 1～5 土層断面図 (1 : 100)



第17図 平尾遺跡調査 B地区平面図・土層柱状図 (1 : 300, 1 : 40)



第18図 平尾遺跡調査 B地区SD 1～4 土層断面図 (1 : 100)

溝の可能性を残す。遺物は認められなかった。

(2) B地区

溝を7条、ピットを2基確認した。SD 2の幅は1.0mを測り、7条の中で最も広い。どの溝からも遺物は認められなかった。ピット2からは土師器小片が出土した。



1. 10YR2/1 黒色粘土
2. 10YR1.7/1 黑色粘土
3. 造成土
4. 砂管

0 2m

第3節 遺物

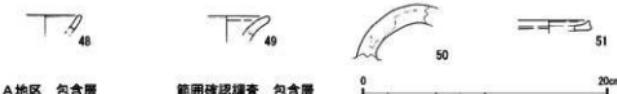
本調査で山茶碗や土師器、陶器が出土した。また、範囲確認調査では遺跡南側で、土師器や焰口、水注などが出土した。

(1) 包含層 (第19図48)

黒褐色粘質土層 48は山茶碗の口縁部である。その他、土師器体部小片及び江戸時代以降のものとみられる陶器片を検出したが図示しうるものはない。

(2) 包含層(範囲確認調査) (第19図49～51)

49は土師器甕の口縁部である。飛鳥・奈良時代と推定される。50は古瀬戸の水注と推定される。把手の部分のみが出土した。本体との接点部分がわずかに残存するものの、把手の半分を欠失している。自然軸がかかり、垂れるようすから把手は上向きの箇所と思われる。15世紀あたりと推定される。51は近世の焰口縁部である。



第19図 平尾遺跡調査遺物実測図 (1 : 4)

第7表 平尾遺跡調査 遺構一覧表

遺構名	種別	調査区	規模 (m)	残存深 (m)
SK 1	土坑	A地区	径4.4	0.40
SK 2	土坑	A地区	径1.4	0.15
SK 3	土坑	A地区	径1.5	0.42
SK 4	土坑	A地区	径2.4	0.45
SK 5	土坑	A地区	径0.9	0.45
SD 1	溝	B地区	幅0.4	0.30
SD 2	溝	B地区	幅0.9	0.25
SD 3	溝	B地区	幅0.3	0.15
SD 4	溝	B地区	幅0.4	0.15
SD 5	溝	B地区	幅0.3	0.20
SD 6	溝	B地区	幅0.4	0.20
SD 7	溝	B地区	幅0.2	0.25

第8表 平尾遺跡調査 出土遺物一覧表

【凡例】

臺持図番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

*実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

臺持土・軸渠の色調は『新版 標準土色帖』に掲げる。

探査番号	実測番号	調査区	出土上遺構	種別	器種	法量 (cm)	文様・調整	色調	残存度	備考
48	001-01	A地区	包含層 (黒褐色粘質土)	陶器	山茶碗	— —	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	灰白10YR7/1	口縁部小片	
49	001-02	範囲確認調査 No.22	包含層 (黒褐色粘質土)	土師器	甕	— —	外:ナデ 内:ナデ	にふい黄緑10YR7/3	口縁部小片	
50	001-03	範囲確認調査 No.7	包含層 (暗褐色粘質土)	陶器	水注	長さ 7.0	外:ナデ 内:ナデ	灰白2.5Y7/1	把手1/2 自然軸	
51	001-04	範囲確認調査 No.21	包含層 (黒褐色粘質土)	土師器	焰口	— —	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	にふい橙7.5YR7/4	口縁部小片 煤付着	

第VII章 調査のまとめと考察

第1節 北野遺跡

今回の第12次調査では、堅穴建物1棟、土坑3基、溝2条が確認されたものの、時期の分かる遺構が少なく、また遺構密度としては薄い印象を受ける。

堅穴建物1棟は古代前半以前のものとみられる。これは北野遺跡の隆盛する時期とほぼ同時期にあたり、人間生活の活動範囲の広がりを認めることができる。しかしながら、今回の調査では単独での検出となっており、その近くには同時期の土坑・溝といった遺構も認められなかった。

古代前半以降の遺構としては、11世紀代の溝が1条認められたのみである。また、中世以降の遺構は見られなかつた。

平成28年度に調査した北野遺跡（第9次）・安養寺跡（第8次）・古墳遺跡（第9次）の調査区もまた、遺構や遺物の量が薄い地域であった。地形的にも中位段丘の縁辺部にあたるこの調査区一帯は、遺跡の北限にある。今回の調査結果と併せ、この調査区一帯は段丘中心部と比べ、遺構の薄い地域、つまり人間活動に制限が見られた場所にあたるものと考えられる。

また、活動時期についても、隣接する調査区における遺構分布の時期と、今回の遺構の時期は重複し、主に7～8世紀代に收まる。北野遺跡の隆盛した時期を過ぎると、この地域の人間活動も衰退したものと考えられる。なお、土師器生産を連続と続けてきた有爾周辺地域も、古代と中世の間に断絶があったことも明らかになっている¹⁾。遺構の薄いこの地域においても、土師器生産の中心を担った北野遺跡を中心と同様の活動時期が見られたことは、当時の土師器工人集団と少なからず関わりをもった人々が居住していた可能性を示唆する。

中世以降の遺構が見られなかつたことについては、この調査区一帯の土地利用が、土師器生産と切り離されて利用されるようになったものと考えられる。鎌倉幕府成立後、神三郡は守護不入の地として確保されたものの、主に武家による侵略・横領が相次い

だとされる²⁾。この地域の伊勢神宮への影響力が低下し、南北朝期には齋宮も廃絶する。こうした時期に伊勢国有数の大寺院・安養寺が建立され、土師器づくりも伊勢神宮への奉仕的生産から、商品土器への生産へと発展している³⁾。

こうした時代背景から、土器生産を商業的にシフトした集団は生産を局地化させるために、樹木の少ない段丘縁辺部での生産は望まず、この調査区一帯での土器生産および人間活動が下火になった可能性が考えられる⁴⁾。特に安養寺建立後については、安養寺が堀を設けて寺域内外の区画を明確に分けていたと考えられている⁵⁾ことから、この寺院を取り巻くこの周辺は、当時から土地利用が差別化されていたと考えられる。寺域外にあたる堀の外は現況の様な耕作地や雑木林で、人がまとまって生活する居住地とは離れていた可能性が考えられ、それが今日まで脈々と受け継がれてきたのではないかと考えられる。

【註】

- 1) 小林秀1992「中世後期における土器工人集団の一形態～伊勢国守護を素材として～」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター
- 2) 小林秀1987「伊勢国北畠氏の神三郡支配に関する一試論」『史蹟』38 日本大学史学会
- 3) 伊藤裕信1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター
三重県埋蔵文化財センター-1990「外山遺跡」『平成元年土農業基盤整備事業地城埋蔵文化財調査報告 第一分冊一』
- 4) 下火になった要因として、土師器の焼成方法の変化も考えらよう。
- 5) 安養寺跡では、幅4～5m、深さ2～3mの大きな溝が見つかっており、この溝が「百軒四方のまわりに堀をめぐらしてい」と伝わる「堀」であったと考えられている。

・明和町2004「明和町史」資料編 第一巻 自然・考古
・乾哲也ほか2016「安養寺跡を語る－安養寺跡発掘調査概要」明和町

第2節 曽祢崎遺跡

(1) 曽祢崎遺跡集落周辺の旧地形

第3次、第4次調査ともに性格の分かる遺構は認められなかった。

今回調査した4つの調査区は、現況の住宅域から100~300m離れた場所に位置する。それぞれの調査区地表面の標高に目を向けてみると、最も高い調査区が第3次調査C地区（標高約7.6~7.0m）で、次いで第3次調査A地区（標高約6.5m）、第3次調査区B地区（標高約4.8~4.6m）、第4次調査区（標高約4.4~4.1m）と続き、その標高差は最大3.5mである。これは現況の主要住宅域（上野集落）である近世参宮街道に近い南の調査区ほど標高が高いことを示している。のことからも、旧地形は近世参宮街道に広がる中位台地は標高を下げながら北方の現曾祢崎集落に向けて舌状にのびていたことが分かる。また、遺構密度の薄さもあり、第3次調査C地区を除く3つの調査区は舌状にのびた台地の縁辺部にあたる場所であると考えられる。

(2) 古代伊勢道の行方

第3次調査C地区的調査区は、古代伊勢道の推定ルート上にかかる場所に位置していた¹¹⁾。今回の調査においては、その存在の有無について判断できる遺構、遺物は認められなかった。ここでは、この調査結果を通じて考えられる古代伊勢道解明の今後の展望について若干の考察を行いたい。

まずは、これまで検討されている古代伊勢道の想定されているルートについてまとめておきたい。

古代伊勢道の在り方には諸説あるが、それらは足利健充氏の研究を端緒としている。そして、平成17年度の丁長遺跡（第1次）発掘調査において、これまで斎宮跡の発掘調査等で確認されていた古代伊勢道遺構と道路方向・道路幅・路面の整形痕跡の態様が一致する道路遺構が認められた。このことにより、これまで斎宮跡以東における古代伊勢道のルートがいくつか想定されていたが、丁長遺跡付近まで復元可能となり、斎宮から東へ向かって出る直線的な経路であったことが分かった（第20図）。これによ

り、方格地割の整備を行った後、斎王の参宮経路および神宮勅使の使用した経路は、飯野郡条里に沿う形で直進していたものと考えられる²¹⁾。離宮院への立ち寄りを想定すると、いずれかの段階で方向を南へと転換する必要があり、今後の古代伊勢道の解明の展望としては、丁長遺跡以東においてこの直線ルートがどこまで続くのかという点が争点となる²²⁾。

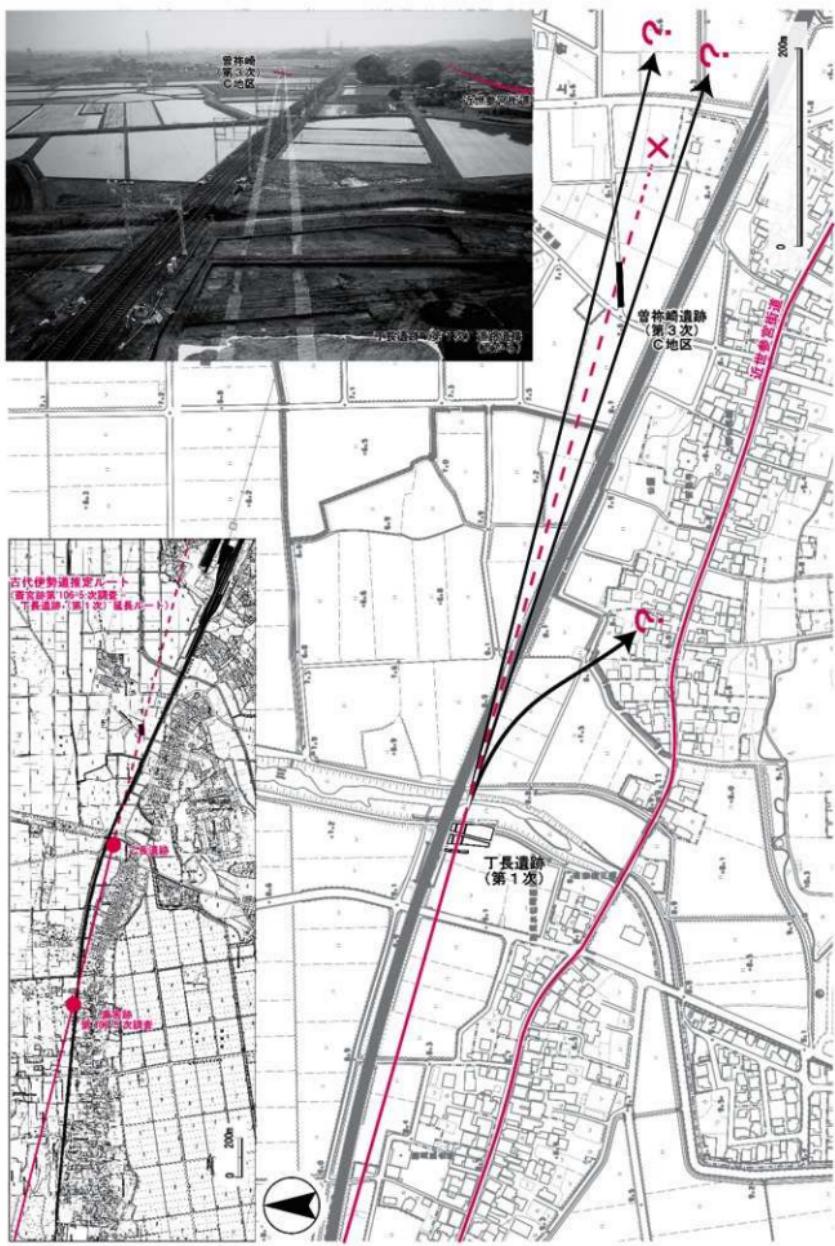
今回調査した第3次調査C地区は、丁長遺跡（第1次）の調査区から東に約500m離れた場所にある。第3次調査C地区的調査区は、斎宮跡第106-5次一丁長遺跡（第1次）の延長させたルートをちょうど横断し、2本の両側溝を確認できる長さの調査区として設定されている。しかしながら、今回の調査で道路遺構が確認されなかった。この調査結果から、次の2つのが推測される。

1つは、古代伊勢道の直線ルートは丁長遺跡を越えた辺りで終息し、地形的により安定した台地側（南に存在する近世参宮街道の方）へと方向を転換させていたのではないかということである。

丁長遺跡以東の地域は、これまでの河川の浸食・氾濫によって形成された中位段丘と沖積地が入り組む地域である。丁長遺跡のすぐ東は現在も農水路が存在する谷底地形で、当季季節によっては水量のある河川であったと考えられる。さらに東に進むと次は大きな明星台地（丁長遺跡の東に約700m）が待っている。この明星台地については、今も残る近世参宮街道も、明星台地付近で台地を迂回するよう南側に方向を変えているほど起伏が大きい。このように台地と沖積地の比高差が大きいために直進移動が困難であったことが想定でき、それらを避ける形で近世参宮街道の通る台地側へと丁長遺跡を過ぎた辺りで方向を転換した可能性がある²³⁾。

2つは、古代伊勢道はまっすぐ存在しているが、本来の推定ルートは、やや北もしくは南を通っていたのか、あるいは今回の調査区は耕作による擾乱・削平が激しく遺構が残存していないかった可能性があるということである。

今回の調査区においては道路の存在を証明することは難しかった。しかしながら、第3次調査C地区



第20図 古代伊勢道推定ルート (1 : 5,000, 1 : 25,000)

の遺構面と丁長遺跡（第1次）の遺構面の標高には大きな差は見られず、古代より長期間にわたってほぼひと続きの土地利用が可能だったものと考えられる。明星台地の直進が難しかったとしても、その辺りまでの直進は可能であったであろう。つまりは、今回、斎宮跡第106-5次調査区と丁長遺跡とを結んだルートを推定ルートとしたが、わずかにルートがずれていた可能性が考えられる。

以上のような考察を行ったが、丁長遺跡以東における直線ルートの推定はまだまだ可能性を残している。今後も開発事業等調整には慎重な対応を必要とし、古代伊勢道が解明されることに期待したい。

【註】

- 1) 今回、丁長遺跡以東における古代伊勢道の推定ルートとしては、丁長遺跡の道路遺構と斎宮跡第106-5次調査区（丁長遺跡の西方約850m）の道路遺構とを結んだ復元ルートを延長したものである。
- 2) 三重県埋蔵文化財センター2009『宮川用水第二期地区埋蔵文化財調査報告書VI 丁長遺跡（第1次）・大谷遺跡（第1・2次）発掘調査報告』
三重県埋蔵文化財センター2007『丁長遺跡（第2次）発掘調査報告書』
- 3) 第2次宮院は丁長遺跡の南東約3kmに存在する。
- 4) これまでの調査から、古代伊勢道は岐阜の東約150mにおいて、旧竹神社跡を迂回するように方向を変えていたことが確かめられている。そして、その後再び地割方向に沿う形で直進している。直進ルートを主眼に置きながらも状況に応じて迂回することもあり得る例である。

第3節 鱗尾城跡

鱗尾城跡は16世紀頃に築かれた中世城館とされ、土塁や堀切は残らず当時の姿をとどめていない¹⁾。今回の調査区は鱗尾城跡の南東端部にあたり、城館に関連する遺構や遺物検出の成果を期待した。調査の結果、土坑2基と小穴を確認し、土坑からは鉄鉢及び山茶碗が出土した。鉄鉢の時期は17世紀頃であるが築城時期とかなりずれがある。今回の調査

は、範囲が狭く、また出土遺物も寡少であるため、遺跡の性格を知るための成果は得られなかった。今後の調査成果に期待する。

【註】

- 1) 明和町2004『明和町史』史料編 第一巻 自然・考古

第4節 平尾遺跡

平尾遺跡の発掘調査はこれまでになく、表面採集による遺物のみであった。今回の調査では、A地区で5基の土坑、B地区で7条の溝を検出した。土坑の一つからは山茶碗の小片を確認した。また、範囲確認調査では遺跡範囲の南東部で土器類や古瀬戸の水注を検出した。これらのことから、遺跡の存続時

期は飛鳥・奈良時代及び15世紀頃と推定されよう。ただ、堅穴建物など居住にかかる遺構はみられなかった。またB地区の溝はそれぞれ近接するものの方位に規則性は認められない。どの溝からも遺物は確認できず、所属時期は不明であった。

第5節 おわりに

北野遺跡、曾祢崎遺跡、鱗尾城跡、平尾遺跡が存在する明和町では、この4遺跡の他にも多くの調査が行われ、研究の積み重ねが行われている。今回の調査では、新しい発見を含むような遺構や遺物は見られなかつたが、地域の旧地形に関わる遺跡内の遺

構の粗密箇所を明らかにしたり、古代伊勢道推定ルートの可能性について検討したりすることができた意義は大きいと思われる。今後、こうした発掘調査による成果が活用され、当該地域における地域史のさらなる充実につながっていけば幸いである。

写 真 図 版

写真図版 1 北野遺跡（第12次）調査



調査区北部全景（北東から）



調査区中央部全景（南西から）



調査区南部全景（南西から）



SD 1201 土層断面a—a'間（北東から）



SH 1207（南西から）

写真図版 2 北野遺跡（第12次）調査

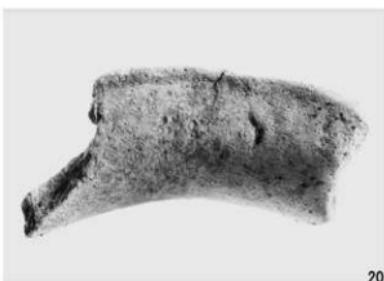
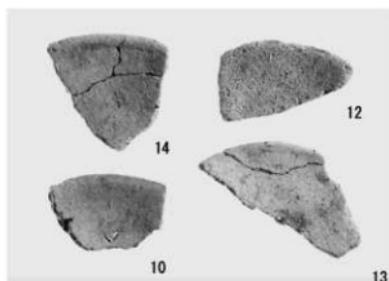
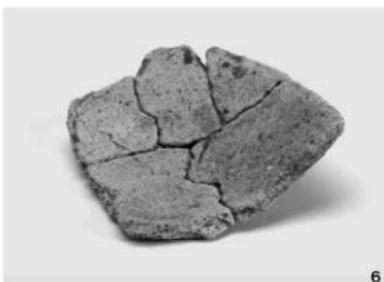
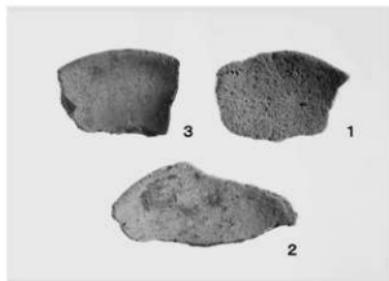


S H1207 (南から)



S D1206 (南東から)

写真図版3 北野遺跡（第12次）調査出土遺物



写真図版 4 曽祢崎遺跡（第3・4次）調査



第3次調査 A地区全景（西から）



第3次調査 B地区全景（東から）



第3次調査 C地区全景（西から）

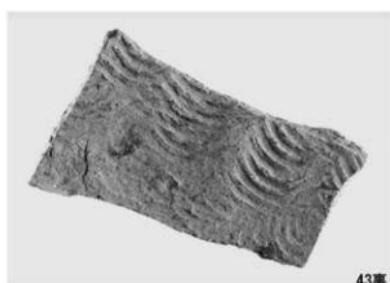
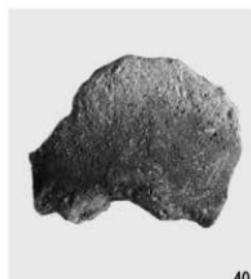
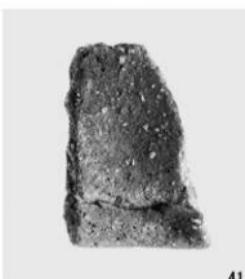
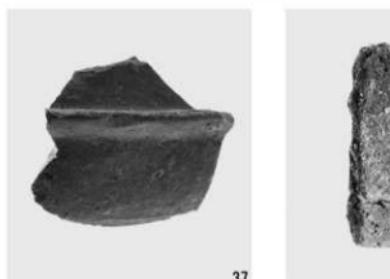
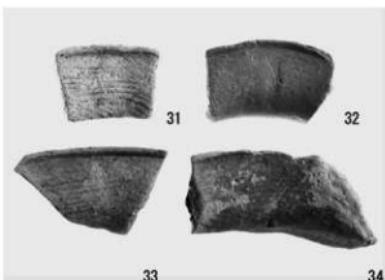
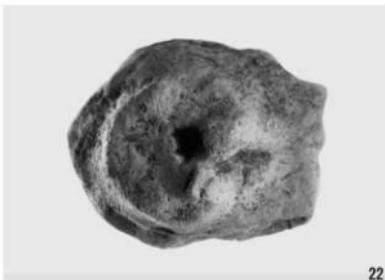


第4次調査区 全景（東から）

写真図版 5 曾祢崎遺跡（第3・4次）調査出土遺物



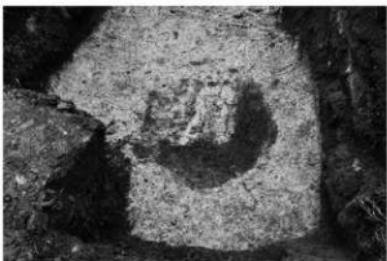
土師器壺?
(第3次B地区)



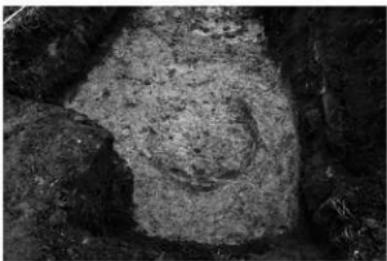
写真図版 6 鱗尾城跡調査・出土遺物



調査区全景（南から）



SK 2 掘出状況（北から）



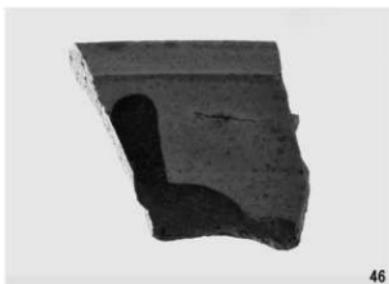
SK 2（北から）



44



45



46



47

写真図版 7 平尾遺跡調査



調査前（B地区 東から）



A地区 東端～24m 全景（南東から）



A地区 24m～西端 全景（西から）



A地区 SK 2（北東から）

写真図版 8 平尾遺跡調査・出土遺物



B地区全景（東から）



B地区全景（南西から）



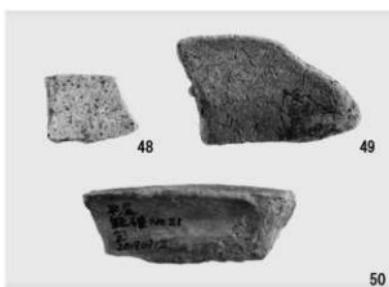
B地区東側（西から）



B地区 SD 1（南東から）



B地区 SD 5（南から）



50



50

報告書抄録

ふ り が な	きたのいせき(だいじゅうにじ)・そねざきいせき(だいさん・よじ)・ひろおじょうあと・ひられいせき はっくつちょうさほうこく							
書 名	北野遺跡（第12次）・曾祢崎遺跡（第3・4次）・鱗尾城跡・平尾遺跡 発掘調査報告							
副 書 名								
卷 次								
シリ－ズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリ－ズ番号	3 9 0							
編 著 者 名	中井英幸・中村法道							
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2020（令和2）年12月25日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
北野遺跡	多気郡明和町 上野・平尾	442	228	34° 31' 52"	136° 37' 39"	20180129 ～ 20180202	396.8m ²	平成29・30・ 31（令和元） 年度高度水 利機能確保 基盤整備事 業（斎宮地 区）
曾祢崎遺跡			525	34° 32' 11"	136° 38' 28"	20171102 ～ 20181016		
鱗尾城跡			254	34° 32' 24"	136° 38' 23"	20181010 ～ 20181015		
平尾遺跡			250	34° 32' 34"	136° 38' 32"	20190930 ～ 20191003		
所收遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北野遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	堅穴建構・土坑、 溝、ピット	土師器				
曾祢崎遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	溝、土坑、 ピット	土師器、須恵器	古代伊勢道隣接			
鱗尾城跡	集落跡	鎌倉時代 江戸時代	土坑、ピット	山茶椀、陶器				
平尾遺跡	集落跡	古墳時代 ～中世	土坑、溝、 ピット	土師器、山茶椀、 陶器				
要 約	県内有数の土師器生産地である北野遺跡では、最盛期と同時期にあたる古代前半の遺物を含む溝や、同時期と思われる堅穴建物が見つかった。遺跡の北限にあたるこの調査区一帯は、遺構密度が薄く、中世以降は遺構が見られなかったことから、土師器生産から農耕へと土地利用を転換した可能性がある。							
	曾祢崎遺跡では、古代伊勢道の推定ルート上にかかる調査であったが、道路遺構は見られなかった。斎宮から直線的に東方向にのびると推定されたルートは、この地点周辺で南へ方向転換をしたか、あるいは、少しずれた位置に存在する可能性が考えられる。							
	鱗尾城跡では、遺跡南端部にあたる調査区から土坑や小穴を確認した。土坑からは17世紀頃に属する鉄絵鉢等が出土した。							
	平尾遺跡では、土坑5基や溝7条等の遺構を確認した。土坑から山茶椀等の遺物が出土した。							

三重県埋蔵文化財調査報告 390

北野遺跡(第12次)・曾祢崎遺跡(第3・4次)
・鱗尾城跡・平尾遺跡 発掘調査報告

2020(令和2)年12月
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 共立印刷株式会社
